小田原史談
第 161 号
発行所　小田原史談会
小田原市栄町2-13-20

想いは深し五十年前

富田千春

一　銃後の守り

昭和六年の満州事変から、上海事変、日中戦争、昭和十六年十二月八日の「大東亜戦争」の開戦と泥沼化して行く本格的戦時体制で、農村は、食糧増産の掛声、米麦の供出が強行され、野菜類の供出割り当ても始まった。肥料、資材難、労力不足の悪条件下で、食糧を始めとして、国民全体全くの耐乏生活で「欲しがりません勝つ迄は」の合言葉のもとで生活の不自由、不便を忍んだ。

就職始めから私は、実業補習、青年学校の勤務で、大東亜戦争の時は、上府中村（現・小田原市）外四ケ村学校組合立千代青年学校にいた。千代青年学校は県下でも特殊な珍しい存在であった。高等小学校卒業後、昼間二ヵ年の修業年限で、生徒は、大体が専業農家の男女子弟で、足柄上郡、下郡、小田原一円からの集まりであった。このため私は、食糧増産要員を兼ね、水稲の増産、野菜特に甘藷の増収、肥料の硫安団子の作り方などの指導、出征軍人家庭への勤労奉仕等と銃後の守りに毎日を過ごした。

また、戦時中の授業は特別で、竹細工講習会を開いて、熊手、竹箕、目篭等を作らせたり、自家製の手造り豆腐、麦芽を使った水飴や、菜種、椿の実等の植物油、畑での木炭焼き等自分も勉強したし、戦時中だけに色々と喜ばれる授業が出来た。

二　旧日本軍パイロットの墓

太平洋戦争も末期、昭和二十年の元旦は、除夜の鐘でなく、敵機来襲のサイレンで夜があけ、朝迄に二回も空襲警報があった。

その年の二月十七日は、前日から艦上機の空襲が、帝都の空へ一日中あり、入れ代わり立ち代わり続き不安な一夜だった。朝六時五十分空襲警報があり、昨日に続いて五十機程の敵機の編隊が頭の上を帝都を目指して北東の空へ飛んで行った。空襲警報でこの日は授業はないが、職員はいつものように勤務、十時頃一編隊が物すごい爆音を立てながら学校の上空を相模湾へと脱出して行った。

学校には防空壕がなく、空襲になると校長始め一般職員は、軍が調達した縄が廊下に山と積まれたその陰に身をひそめるのが常だった。私は、敵機の状況を見たいので一人学校前の川の石橋の下にもぐって、避難しながら敵機を見ていた。

半時間程して次の編隊六、七十機が前のように相模湾の方へと、頭の上を通った。その時、国府津の方から三機が飛来し、オヤッと思っていると、ダダダーと機銃掃射の音。一機は、煙を吐きながら曽我山の方へ、二機は、帰って行ったが、白い煙の一機は落ちて六本松の方で黒い煙が上がった。戦時中とはいえ、飛行機が落ちたという事は大事件、大急ぎで自転車に乗って六本松の方へ走った。六本松を越して沼代（現・小田原市）という所の山の中腹に、煙と人だかりがしていて墜落現場に着く。山に突き刺さったような機体、タンクからこぼれた燃料が燃えているその中で、パイロットが操縦桿を握ったままの格好で死んでいる姿が、今でも脳裏に焼きついている。

後日知った事だが、戦死した飛行士は、鹿児島市来町出身の上原重雄中佐（当時二十六歳）。愛川町中津の航空基地の戦闘機隊長で、来襲した百機余りの米軍機を一機で迎え撃っ

特集　戦後五十年

墓標を守り続ける片木節雄氏。右　筆者

たという。戦争の末期、神風特攻隊とか、人間爆弾桜花とか騒がれている時、度重なる敵機の来襲に、日本軍パイロットとしてじっとしていられないで、特攻隊の気持で体当り攻撃を買って出たものと思う。

この事は長い年月忘れていたが、一昨年の朝日新聞で「戦死パイロットの墓を住民守り続けて半世紀」戦争の記憶を風化させるなの記事があり、沼代の片木節雄さんのお骨折り等を知った。

今年の二月十七日は、五十年目の命日、遺族会の人たちは、プロペラに「上原重雄戦死之地」と刻んだ上原さんの墓に花や線香を供えて冥福を祈った等の記事があり、小田原上空で米軍戦闘機と交戦し撃墜された現状を目撃したのも何かの御縁と、先日片木さんの案内で、花と線香をもって墜落現場へお墓参りをした。

戦死した戦闘機隊長上原重雄中佐

三　下曽我駅の空襲

日米開戦四ヵ月、日本軍は、南に北に破竹の進撃を続けていたが、昭和二十年ともなると敗戦の色濃く、陸海軍は、本土決戦態勢をとり、敵の相模湾上陸に備えて、姫路の部隊が曽我山に陣地構築作業と澤山の砲弾の積み込みを始めた。それを知って、下曽我駅にグラマン艦載機が来襲、機銃掃射が執拗に行なわれた。

下曽我駅の空襲は、八月三日、五日、七日と三日間にわたり、何れも正午頃であったが、八月五日が最も激甚だった。北方から飛来して駅に停車していた貨物列車に機銃掃射を加え、機関車を運転不能にし、貨物ホームに置いてあった三百個余りの十糎砲弾が、さく裂するし、南方の石油補給ルートが遮断されて石油不足のため、同じホームに積んであった各地の松の木から採取した飛行機用の燃料、松根油ドラム缶が次々と引火して大火災となった。近くの民家も次々と延焼し、駅前の家二十余戸も焼けてしまった。

空襲が大体収まったのを見計らって、焼けた知人宅へ見舞いに、自転車で駅前に行ったが、まだ火災が激しく、時折弾薬もさく裂するので近付けなかった。

こうした中で最も痛ましかった事は、同じ学校に勤めていた駅前の小川先生の家で子供さんとお母さんの二人が機銃掃射で亡くなった事であった。この日先生は、夏休みで朝から奥さんと曽我山の開墾に出かけて留守であった。祖母と子供四人で留守番をしている昼時に空襲だった。空襲は慣れっこになっているので、防空壕にも入らず家の中に居たが、駅が燃えているという騒ぎで、中廊下に並んで窓から見ている時、ダダーと機銃掃射を受け、四人の子供のうち三人が被弾し二人亡くなった。夏の暑い次の日、小さな子供さんが位牌を持っての葬儀には、戦争の悲しさ痛ましさを今でも思い出される。

この他に消防団員の人が砲弾の破片で亡くなっている。市役所下曽我支所の裏に、忠魂碑と並んで建っている「殉国之英霊」の石碑には、支那事変、大東亜戦争戦死者と共に戦災による一般犠牲者の名が刻まれ、その中に小川さんの二人の子供の名前も記されていて、戦争の惨しさが残っている。

四　本土の空襲

日本は神国、いざという時は神風が吹いて、戦争には絶対負けない教育を受けていたが、制海権も、制空権も敵に握られ、サイパンを米軍が占領するようになってからは、その基地から発進する戦略爆撃機B29が超航続距離をもって高高度一万mを飛行し、日本軍の高射砲は弾丸が届かないため、悠々と日本本土爆撃をするようになり、また、艦載機が銃爆撃するようになった。

小田原近辺の軍需工場、湯浅電池、富士写真フィルムや、大蔵省印刷局もやられた。早春の昼頃だったか爆撃機が一機海岸線を低空で小田原の方から国府津方面に飛んでいて、酒匂の上空に来たら鳥が糞をする様に爆弾をタタタと落として行った。弾丸は初め水平に落ち、二～三秒すると弾頭を下にし垂直に落ち、その後大きな爆音のするのを千代の台地から見た事がある。

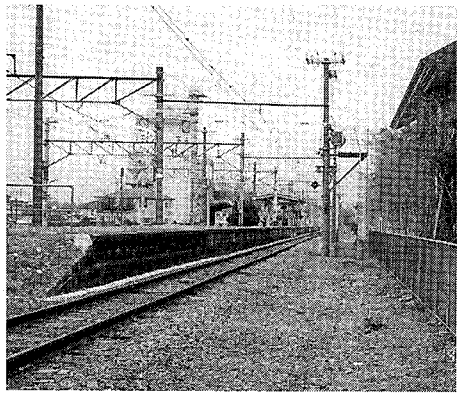
酒匂川飯泉土手で見た爆弾の痕の大穴、八月十三日、新玉国民学校グランドに投下された爆弾の痕等爆撃の威力を思う。

地上すれすれに飛んで来て人を見ると狙い撃ちにパンパンとやる機銃掃射、下曽我駅の空襲もこれである。二宮駅前に銅像として建てられ、また、テレビ放映もあり、涙を流した「ガラスの兎」の話は、機銃掃射による、母親の悲しい死を伝えるものである。小型の艦載機で、走っている列車の狙い撃ちや、道を歩いている学童を追いかけたり、通り魔的な無差別空襲は、恐ろしい悲劇的空襲災害を残している。

日本の都市は焼夷弾に弱い、それを覚悟で防火訓練もされたが、桁はずれの物量では、なす術もなく、三月十日の東京大空襲を始め殆どの都市は焼夷弾で焼かれた。

私達の地域も、五月二十三日、千代西河原田圃から成田にかけて二千発が投下された。全面畑で被害はなかったが、始めて見る焼夷弾、朝方見に行ったらまだ地面にささって煙が出ていた。

七月十七日の空襲は、平塚市が中心で、帰りに、東大友、永塚、千代



下曽我駅　左手が空襲を受けた場所

と次々に焼夷弾を落として行った。この夜飛行機の爆音で外に出て見ると丁度投下したばかりで束になって落として行くと思ったら、中空で、パッとなって四方に飛び散り、すごい火花となって落下、夜空を真赤に焦がした物凄い眺めだった。そのあと学校に駈けつけると、学校前の水田に焼夷弾を落としながら矢作の浅間神社の方向へ行ったのか、水の張られた田圃に焼夷弾が一列に続いて火を噴いていて、思わぬ珍しい情景に出会った。

小田原として忘れられないのは、八月十五日午前の真夜中、B29一機、相模湾脱出の折、残した焼夷弾を落して行き、青物町、宮小路を廃墟と化した。

戦争も末期になった頃、米軍機から一般大衆に向って、無益な戦争は止めろとの伝単（宣伝ビラ）が盛んに散布された。高い空を敵機が悠々と飛びながら伝単をまく。伝単は、蜘蛛の子が散るようにヒラヒラと空中を舞いながら中々落ちて来ない。やっと拾うと、それには色々教えられる事、参考になる事もあったが、家々には回覧板が廻って拾ってはならないといわれているので一読して捨ててしまった。紙一枚でも貴重品の戦時中、戦争もここ迄来ると戦力に大差があり仕方ないと感じた。

五　終戦の玉音放送

終戦の前日から、明十五日は正午に天皇陛下の玉音放送があるから必ず聞くようにとの放送が繰り返しあった。重大放送とはどんな事か考えながら正午を待った。

日本は神国、戦争には敗けた事はない、敗けないと教育されていただけに、全く思いがけない敗戦の詔勅であった。

病気で年老いた父を抱えているだけに、敵兵が上陸したらという懸念が頭からはなれなかった。

沖縄全滅、本土決戦、一億玉砕等の記事や米軍の上陸進攻作戦に相模湾上陸計画がある等を聞くにつけ、あと一ヶ月したら神奈川県一帯は、沖縄以上の惨禍を蒙ることを思うにつけ、最後の御前会議で、昭和天皇のご聖断で「ポツダム宣言」を受諾することとなり、難しい戦争が終結した事は、本当に有難い事だった。

（了）

虜愁記⑤

ラーダ・収容所（ラーゲル）の生活

藤野　明

その日から我々はラーゲルの手となり、足となって活動を始めた。

或る人は靴屋になった。又ある人はつくろい屋になった。次の人は大工となって家を建て、屋根を修理して廻った。

炊事に行く人、パン工、自動車修理工になった人、さらには理髪屋から浴場、劇団、薪割り、木挽、おあい屋に到る迄、決っていった。ある人は医者となり、また洗濯屋に早変りした。

しかし、これは皆、我々七千人の為の仕事であった。

農場へ、伐採へ、工場へ、干草作りにその他好みもせぬ労働に長く狩り出された人達もあるが、病院のお世話にならなければならない人々もあった。

我々が自活する為の全ての事、薪取り、水汲み、清掃、糧秣取り扱い、否、もっともっと多く作業が次の日も次の日も変転極まりなく続く日を送った。

中でも厳しく、辛い作業だったのは、冬の貯蔵馬鈴薯の皮むきであった。

ソ連は、我々に腐った小さい薯を食糧としてよこした。足の凍るような作業場でランプが暗く、外套にうずくまりながら石ころのように凍ったカチカチ薯の皮をゴリゴリむく仕事である。泥と氷がぐちゃぐちゃに混じった薯は、氷をつかむ如く、何時しか、我々の指先は、薄白くなり、凍傷に侵されていた。

筆者がソ連から密かに持ち帰った資料

遥かなる覇王城（1）

―終戦から50年　中国戦線の回想―

星野幸一

一　南船北馬

出征兵士を乗せた軍用列車が甲府駅を出発、品川駅に到着したのは昭和十五年（一九四〇）十二月二十日であった。隊列を組んで芝浦埠頭に向かう。最後の別れになるかも知れない兵士との面会を求め、家族や友人たちが沿道から埠頭にごった返していた。輸送指揮官は、見城部隊（歩兵第二二〇聯隊初代聯隊長見城五八郎大佐）第一MG中隊長（MGは機関銃の符号）の土屋大尉であった。

駄載して山岳地帯を進む聯隊砲

西の空が茜色にそまり、クロスしたサーチライトの光芒が照らし出す勇壮な行進や、馬上から抜刀して指揮する土屋大尉の厳めしい姿に兵士たちの胸は高鳴ったのである。乗船後点呼（名を呼び人員の確認）があった。出港の汽笛が鳴り響き、輸送船が静かに岸壁を離れた。

新兵全員がデッキへ出て別れを惜しみ、見送りの人たちは、日の丸の小旗を千切れるばかりに振り、埠頭は歓呼の声で沸き返ったのである。そして肉親や恋人たちは、生還を念じ船影が東京湾から小さく消えるまで見送った。

航路は外洋から豊後水道に入り、門司港に停泊一夜食糧と水を補給した。玄海灘が荒れ船酔いする兵士が続出したが黄海に入ると凪いだ。十日間に亘る船旅は来る日も来る日も目にみえるものは太陽と海、夜空には星が瞬いていた。山東半島と遼東半島に挟まれた海峡から渤海に入り白河の河口の塘沽港に着岸した。タラップを降りたのは昭和十六年（一九四一）の元旦であった。

冬の白河は結氷して、港には流氷が犇めいていた。上陸して驚いたのは、どちらを向いても石炭の山である。見渡す限り石炭が堤防状に列をなし、日本とはまるで別天地であった。

この日は休養のため町の公衆浴場に行くことになり、暫く歩くと飲食品、道路脇に椅子を据えた青空床屋、日用品雑貨等を商う店が両側に並び、その奥まったところに軍貸し切りの浴場があった。湯船は二十畳ほどの広さで、湯は溝のように濁っていた。不衛生に感じたが、新兵は、甲府出発以来入浴する機会がなく、垢だらけの身体は薬湯のように温まったが、まるで芋を洗うようできれいに洗い流す余裕はなかった。

通りの商店は出入りする中国人で賑っていた。私は、異なる服装を眼の当たりに異なる言葉を聞き、町並みは、泥壁や煉瓦造りの家、同文同種とは云うものの正しく異質の文化との出会いであった。

翌朝、京山線で天津を経て北京へ向った。沿線の田園地帯には、所々軍服で髭を生やした仁丹の大きな広告看板が立っていた。列車の中で誰かが、中国人は仁丹を一粒飲めばどんな病気も治ってしまうと云ったが、当時の中国では貧富の差が激しく、苦力と称する下級労働者が町に溢れていた。

北京から京漢線に乗り継いで南下し保定、石家荘、湯陰を経て新郷駅に到着した。果てしない昿野の旅を1000kmもひた走ったのであろうか、ふと火野葦平の『麦と兵隊』が脳裡を過ぎったのである。ホームでは広軌の機関車が蒸気を吐いていた。

二　新郷の町

新郷駅に到着したのは昭和十六年（一九四一）一月三日であった。この町は私が中国で暮した最初の町である。河南省では黄河北岸の中心都市新郷県の県庁所在地で、見城部隊の本部があった。

町は駅を基点として京漢線の北側が市街地、踏み切りを渡って南側は野戦倉庫、新兵舎、将校官舎、偕行社、飛行場等日本の軍事施設であった。駅前ロータリーから道筋には、すし屋「江戸っ子」、喫茶店「ふるさと」「千辰」、スナック「暫く」おでん屋「奴」、日本ホテル、大和ホテル、刀剣屋、歯医者、書店、レコード店、妓生（朝鮮の芸妓）の店等が軒を連ね、中程左側の奥は、歓楽街となり「鹿児島屋」という料亭等があった。駅前左手には「風月堂」という和菓子屋があり、その横を左に折れて100m先が聯隊本部、陸軍病院、その右側は大きな紡績工場であった。場末には映画館、新郷神社、西本願寺、日本人小学校、教員宿舎、ナイトクラブ「美松」等があった。

中国人の町は日本人街の北側で市街では洋車（日本の人力車）が走り、ちらほらり纏足（昔の中国の風俗、女性の足を大きくしない）した女性が歩いていた。洋車には幌が無く、中国人の車夫は愛想良く、乗ってみると町中での走行はエキゾチックであった。

三　初年兵教育

町の概要を記したが新兵舎でいよいよ初年兵教育が始まった。私は、第一MG中隊biA（大隊砲の符号）班に編入され、乗馬、輓馬（砲を輓く馬）、駄馬（弾薬等を載せて運ぶ馬）として馬も扱った。

これから始まる初年兵教育がどんなものか話には聞いていたが、四ケ月間の教育でみっちり鍛えあげられた。教育全般に亘り私的制裁のメニューが用意され、随分酷い目に合い眼から火が出ることも度々あった。軍律を維持するため上官の命令には絶耐服従するという枠に嵌め込まれたのである。新兵は、古参兵の殴り、蹴り、怒鳴りまくる制裁を通して軍人精神が叩きこまれ、何とか使える兵隊に育っていったのだらうか。

初年兵教育第一期の検閲（検閲官栗栖大佐二代目聯隊長）が終ると、新兵は古参兵の下働きとなった。

四　中原会戦

昭和十六年五月七日から六月下旬にかけて、山西省南部太行、中條両山脈東西二〇〇km南北一〇〇kmにわたって展開された大作戦である。日本軍は北支那方面軍（司令官多田駿中将）主力の六個師団、混成二箇旅団を投入、なお第三飛行集団が参加、陸上部隊を支援した。

一方、中国軍は、南部太行、中條山脈に永久陣地を構築、これを拠点とする衛立煌の中央軍二十六個師団約十八万であった。

この会戦で、中国軍は、捕虜三万五千人、遺棄死体四万二千を出した。日本軍は戦死六百七十三人、負傷者二千二百九十二人であった。

この会戦は、私の初めての戦闘参加であり、貴重な体験であった。

新郷新兵舎に集結した栗栖部隊は、部隊長訓示の後戦闘序列に従って行軍を開始したのだが、周辺は見渡す限り麦畑である。本隊の先頭に軍旗を奉持して延々長蛇の列をなし、後方には輜重を受け持つ行李班の弾薬、食糧、衛生材料、馬糧等を満載した馬車（現地調達した支那馬の荷馬車）が何十台も続いた。部隊長のアイデアで馬車には全車輛に長さ二mぐらいの鯉のぼりを立て青々した麦畑の道を五月の風に戦ぐ群泳は出色であった。通り過ぎた村々からは、遠く近くロバの鳴き声が聞こえ、おどけたような嘶きは、農村に趣をそえる点景であった。

二日後には山麓の町済源を経由して太行山脈にアタックだ。馬部隊である歩兵砲は、歩行のきびしさはそれ程ではなかったが、山岳地帯の行旅は新兵泣かせであった。休憩になると村の井戸や山狭の川等愛馬の飲み水探しで一苦労した。三十分間の休憩中に水嚢（ズック製のバケツ）一杯の水を与えなければならない。喉に手を当てていると、ゴクリゴクリと水を飲む動きが伝わってきた。

悪路を黙々と進んだ幾山河、取った手綱に血が通う。休憩では水飼いと並行して馬の身体を休めるため、分解して積んだ砲を卸すのである。蹄鉄の釘の弛みも点検した。

平地では一馬輓曳の砲も山岳地帯に入ると、道は険しく砲を分解して六馬の背に積んで山路に入ったのである。biAは、砲兵と違い、第一線に進出して、歩兵の前進を阻む敵の重火器を制圧した。行軍中前方部落から突如射撃を受けたことも度々あった。敵のチェコ製軽機関銃や水冷式マキシム重機関銃は中々の威力があった。

又、山では驚くようなところにお花畑が作られていた。彩りも鮮美なピンク、赤、黄、白の花が咲き乱れ、「阿片」をとる薬用種のひなげし（虞美人草ともいう）であった。禁令の薬草は、人里離れた山懐の地を飾ったのである。

山中深く補給が途絶え食い延ばしをしたが、米はなく、第三飛行集団のパラシュート投下による補給で一時凌ぎをしたこともあった。川の水も魚が棲んでいれば大丈夫だ。泥水を布で漉して米を研ぎ飯盒炊さんしたこともあった。

西部太行山脈では、敵が山腹に転々と狼煙を上げたが単発的な銃声を聞いた程度で交戦することもなく、太原（山西省の省都）に進出、正太線にて石家荘へ京漢線に乗り継ぎ順徳、彰徳、湯陰を経て新郷へ帰着したのである。長い作戦であった。

五　幹部候補生教育

中原会戦が終り新郷に帰ると、私は、六月一日付で幹部候補生に合格、上等兵になっていた。続いて甲種、乙種振り分けの試験が待っていた。候補生は、階級章の両側に丸に星の入った真鍮の座金を付けていた。

私は九月一日付で甲種幹部候補生に合格して伍長に進級、九月二十五日には保定幹部候補生隊（栄第一六四九部隊）に入隊した。甲種幹部候補生は、内地の予備士官学校（前年度は盛岡）に入学したが、今年度からは現地で教育する方針に変った。予備士官学校の呼称も作戦軍に属するため、幹部候補生隊という部隊名に変り幹部候補生制度を創設して六年目、私たちは第六期生であり、保定幹部候補生隊（略して保定幹と云う）の第一期生となったのである。学校は蒋介石ゆかりの保定軍官学校（中華民国初代大総統袁世凱が開校）を接収した。十二月一日付で軍曹に進級、この頃になると学校生活にも熟れ聯隊将校団の卵であるという自覚も湧いてきた。

昭和十六年十二月八日非常呼集により全候補生が講堂に集合、校長松浦豊一少将より大本営陸海軍部発表の「帝国陸海軍は本八日未明西太平洋に於て米英軍と戦闘状態に入れり」続いて「ハワイ真珠湾奇襲、マレー半島上陸、宣戦布告」のニュースが発表され、その時、閣下は、古事記が伝える神武天皇御東征の久米歌

厳々し久米の子等が垣下に植えし山椒口疼く
我は忘れじ撃ちてし止まむ

を説き、「撃ちてし止まむ」は、全候補生に対する戦意高揚のスローガンとなったのである。

(続)

小田原中学校出身の保定幹同期生

卒業年次	氏名	住所	摘要
二十九回	島本　勝	小田原市本町一ノ七	戦死
三十回	市川健三	南足柄市怒田二〇一五	戦死
三十二回	譲原純一郎	小田原市小八幡三四九	戦死
	磯部敬一郎	葉山町一色一九四五	戦死
	原田四郎	小田原市下新田二二八	戦死
三十三回	飯田　実	小田原市田島一五八ノ十一	
	石田一男	山北町向原一七二八	
	星野幸一	小田原市扇町二ノ一六ノ三七	

副官の戦死(1)

ソ連軍の圧倒的な火力の許

佐々木　勝衛

東満穆稜の陣地での激戦後小豆山に籠り、それから穆稜、牡丹江間のおびただしいソ連軍の行動する国道を突破し、ソ連の戦車攻撃に対峙したりしながら寧安方面に進んだ部隊は途中悲惨な死景をみた。開拓団の人々であろう、青ざめた顔、虚ろな眼をした老人、婦女子、それに子供の群。

「兵隊さん乾パン下さい」と物乞いする母らしい人の横には死んで居るのであろう青白い二、三歳位の子供が仰向けに手足を開いた儘動かない。誰もがもうこれ以上歩けないのであろう。

恐怖と疲れ、飢えとで、どうする事も出来ないのだろう。そして所々で切腹した将校の姿も見える。

野宿しながら路なき山を越え無人の東京城を遙か左に眺め、とある日本人か満人の住んだらしい、人も犬もいない小集落の泥造りの空家で一夜を明かす。

その翌日八月何日かもう記憶にないが、清々しい日本晴れの良い天気の朝である。

これから何処へ行くのか、そしてどうするのか我々兵隊には何にもわからない。

満洲の広大なる丘陵地帯へと行軍が始まった。幹部候補生の為か、自分と塚野戦友(新潟県五泉市出身)が尖兵となって部隊、前方二〇〇メートル位の所を雑草を踏みしめながら歩いた。三〇分位進んだろうか、左側面は緩やかな傾斜面でその小高い頂上は灌木と雑草が繁って居る。右方向は平な開けた丘陵地帯である。視界は遠く迄見通し出来る筈であった。

突然何処からか重々しいエンジンの鈍い音が聞えて来る。それも一台や二台の音ではない、何の音だろう。だんだんと澄んだ朝の空気に谺するように大きくなって来る。ソ連の戦車・トラックは穆稜の山の陣地から夜を徹し延々と、しかも皓々とライトを照らしながら遙か彼方から穆稜市街に向って来るのを見ただけなので突差に何の音か判断出来なかった。

とにかくおかしいと後方を振り返って見たが部隊もその儘静かに続いて来ている。

塚野戦友と顔を見合わせたが彼も何も言わない(彼ともこれが最後であった)。

彼とは昭和二十年正月、仙台市溜ケ岡の第二十二部隊に初年兵として入営した同年兵である。

そして一緒に厳寒の満洲の虎林へ地下足袋を履いて送られ、同じ迫撃第十三大隊本部に配属され、同じ幹部候補生として仲良くして居った戦友である。五泉市の実家は絹織物関係の仕事をされて、お父様は地元の名士である。そこの一人息子で身長も一七〇センチ位で色の白い細身の眼鏡をかけた、見るからにボンボン育ちの戦友であった。

エンジンを全開したのであろう、不気味な音が益々近づいて来る。振返って部隊の方を見たが、長い隊列は何も言わずに静かに進んで来ている。おかしい何の音だろう。敵か味方か。突如として砲身が目に入ってきた。一五〇メートル程の進行方向右側の稜線の下から敵戦車が不意に姿を現わしたのである。その戦車の

上には歩兵が乗って居り次々と飛降り、戦車が砲を撃ち出すと一斉に、マンドリンを撃ちながら突進して来る。

振り向くと部隊のものは命令もなしに、一目散に蜘蛛の子を散らす様に左側面の斜面に向って駆け出した。

咄嗟の事ではあるが、私は一瞬、大勢走った方にソ連側も追撃するだろうと判断し、一人で今迄進んで来た方向に向って一人駆け出した。

一〇〇メートルも駆けただろうか左横手に副官加藤理介中尉が追い付いて来られ、すぐ後に丸山正雄軍曹もいた。副官と目と目が合った。この儘前方に向かうか、左斜面に向かうかと問われたように思った。全部で三名の小人数であるがそれでも三名になった力強さでその儘前方へ駆ける。副官が先頭となる。

やゝ左前方小高い斜面に三メートル位の細い木が数本あり、五〇センチ位の雑草が疎らに生えて居る。身を隠そうと来て見ると、右側は僅かに窪地になって居る。伏せ！と副官が一声言って眼鏡を取り出し、立ち膝のような姿勢で、その眼鏡を眼に当てたのかどうか、一瞬「アッイカン」と叫んでその儘身を伏せた。

数メートル近く迄ソ連の戦車に追いつめられたのである。エンジンの音はする。敵は状況を見る為に一時停車したのであろう。すぐ又右から廻り込むように動き出した。副官より少しでも間を取ろうと滑り下りる。丸山軍曹の姿が見えない。近くに居るのは間違いない。

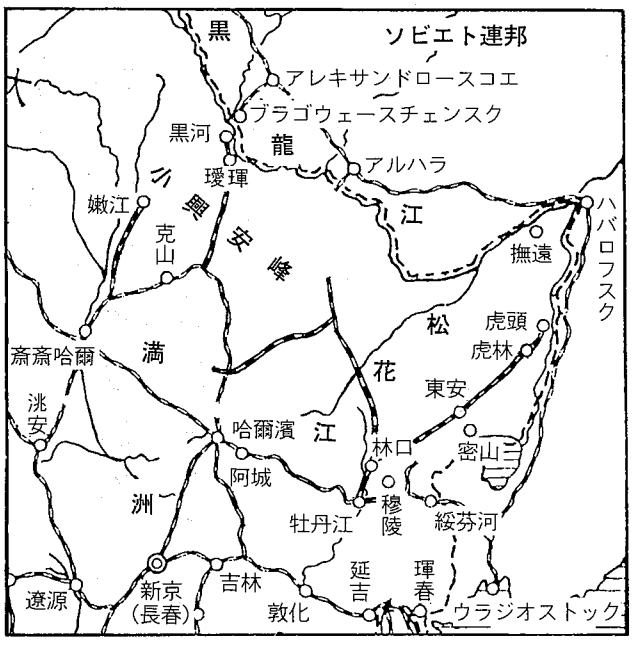
間断なく戦車砲の発射音そして炸裂する音とマンドリンの音、みんな山手の方に向かって攻撃中である。深追いして灌木の繁みに入ると日本軍の肉弾攻撃を恐れてか、追撃してる様子はない。どうして、こちらに来たのだろうか将校一名下士官一名なので服装で解って追って来たのだろうか。もう駄目だ、どうしよう。小銃と手榴弾だけでどうにもならないと観念した。

戦車は木立の右を廻りノロノロ近付いて来る、銃眼からは良く見えるのだろう。動いてはいけない動いたら戦車から機銃弾が飛んで来るに違いない。丸太のような長い砲身が目前に迫って来る。息を堪えて待つ。頭部を引き潰す心算りなのだろう。突差にキャタピラより一メートル程後横に引下がる。

小銃の銃把がキャタピラの下敷きになる。しまった！大切な兵器を潰されてしまった。戦車はその儘ストップした。

銃をそのままにして夢中で四、五メートル位飛び離れた。伏せたまま上眼で見てると戦車の蓋が開いたと同時にソ連兵が頭を出し、そして上半身乗り出すと、マンドリンを構えてバンバンバンと撃ち出した。もうおしまいと観念する。山土の石ころの多い痩地らしく生えてる草も疎らなので弾が地面に当るとパッパッと石ころや黄色の土煙を跳ね上げながら身体の横を走る。私は両脚を開き両腕も前方に広げて伸ばした。少しでも地面に低くへばり付くようにと、無意識にとった姿勢かも知れない。その左手五〇センチ位の所に副官の左靴が見える。丸山軍曹の姿は見えない。しかし戦車の上部に半身乗り出したソ連兵からは、人数は三名と確認して居る筈だし、三人とも伏せて立向かって来る心配もないと安心して居るのだろう。縦横にバンバン撃ち続ける。一瞬グアンと鉄棒で力一ぱい殴られたようなショックと同時に腰から左脚全部が痺れ、そして熱く腫れ上がった感じが一度に襲って来たので、どの辺に命中したのか解らない。次の弾は右脚か、下腹部か腹か胸か、もう一発当ったらたまらない。次の弾が当ったら自爆しようと急いで雑のうから手榴弾を取り出し額の下に両手で拝むような格好で今か今かと待つ。苦しむ前に瞬時に自爆しようと突差の判断であった。

（続）



（編集付記）

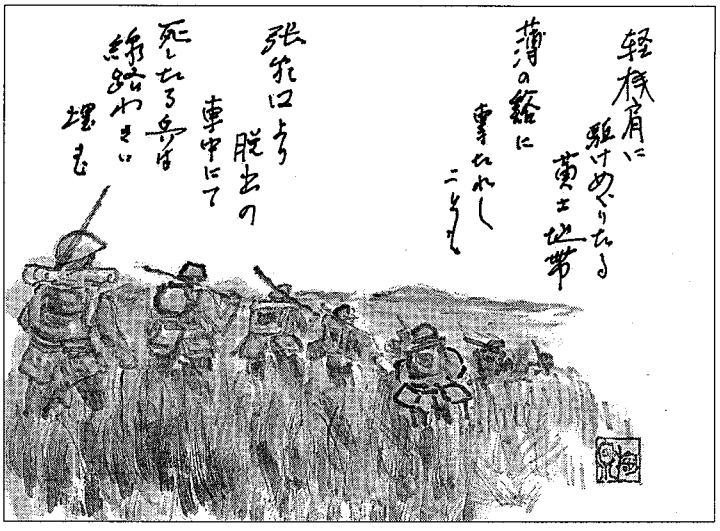
筆者の所属した迫撃第十三大隊は、昭和十七年四月二十五日斎斎哈爾（チチハル）で編成完結。虎林に駐屯。兵員は、満洲国内駐屯の各連隊や独立大隊からの転属と、その後の入隊で、その出身地は、神奈川、東京、埼玉、新潟、福島、宮城などの各府県にまたがる。

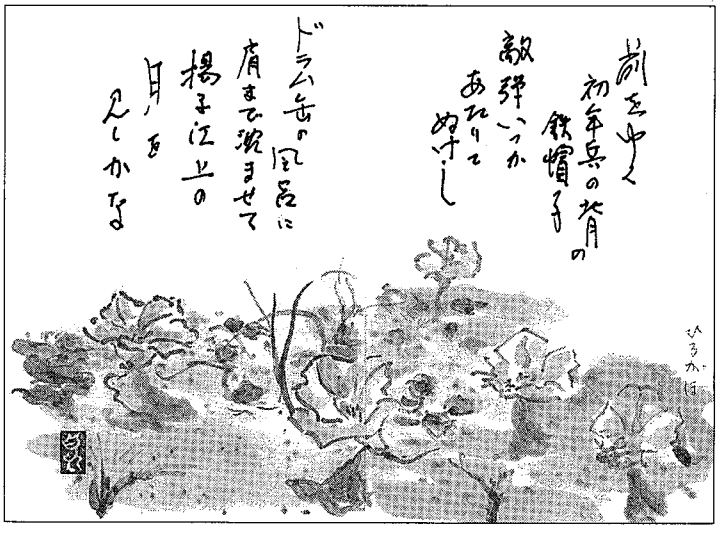
ソ連軍の侵攻時、部隊は穆陵（ムーリン）陣地で死闘。酒匂出身の梶塚修一君は戦死。成田の稲沼修一君は迫撃砲の砲身が焼けつく程、弾丸を撃ちつくした。だが敵の圧倒的に優勢な火力で、どうにも致し方なかったと言う。

茫々五十年
かつて戈(ほこ)とりし事

高田喜久三

去年の春
危ふく命
とりとめて
戦後五十年の
永き日に
おもふ





武装解除されて
身軽に敗残兵
新しき運命
しっかと掴む

嗚(ああ)二十一世紀

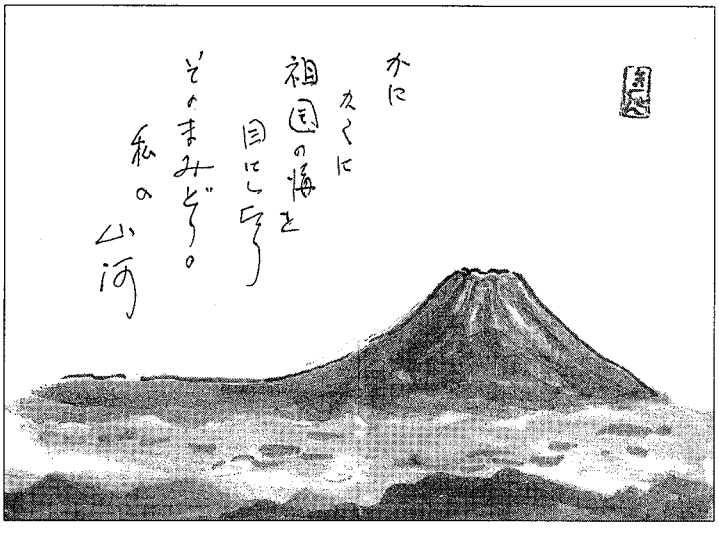
毎年八月十五日が近くなると
マスコミが夏の回想をくりかへす
今年はあれから五十年目だ
敗戦を終戦と誤魔化し
占領軍を進駐軍と呼び替えて
戦争の傷痕を隠すのは
もうたくさんだ

戦争を知らぬ人々
原子核あれこれ気楽に
論じ給ふな

草萌をあたら
軍靴に踏みしこと

黄砂降る
辺土に砲車牽きしこと

万骨のかけらと
生きて敗戦日



原爆忌
空に雲なし慈悲もなし

戦ひの
永き歳月
くいいきて

飽食の世と
憎む虚しさ

戦友は死語となりたり
戦ひの思出のみが
浮かびくる夏

焦土から再び芽生えた蘖（ひこばえ）こそ
戦争を憎しみ人命を尊ぶ
人類の理想の華を
必ずや咲かせることであろう
それこそが二十一世紀へ申し送る
戦中派人間の遺言なのだ

トラック島の敗北 (1)

加藤一

一　海兵団

横須賀海兵団へ入団したのは昭和十五年六月三十日であった。入団すると直ぐ海兵団の規律ある生活に慣れる為の教育が始った。毎日の日課は朝の総員起こし五分前からで、心の中は一日中戦闘状態である。現役兵として入団したので、覚悟は出来ているからこれといって辛いことも苦しいこともなかった。そして、日を追って凡ゆる教育課程が進んで艦上の訓練に入った。

ある日、カッターの着水と揚艦の訓練のときであった。

カッターが本艦に緊縛されているのを解除しボートダビットを外舷に回転し、カッターを宙釣りにしてロープを徐々に、左右平均に緩めて行く。ダビットの根本にはストッパーが着いていて、滑車のロープが暴走しないように操作出来るようになっている。おもてと「とも」のロープを操作する者の連絡と合図の齟齬で、「とも」の滑車がガラガラと走り出した。その時、おもての滑車も回転すればよかったのだが、生憎おもてのダビットにストッパーが掛かっていたから、カッターは、風の無い時の鯉のぼりのようになってしまった。カッターに乗っていた教班長は、このような事故を予め知っていたのであろう、咄嗟にカッターにしがみついて振り落とされず怪我はなかったのである。

早速この事故を重く見た上官は分隊に対し「帝国海軍始まって以来の忌忌しき不祥事であって甚だ遺憾である」と厳しい訓示を受けたのである。その夜、分隊では全員に対して精神の弛緩からこのような事故が起きた、「精神を入れ替えなければならぬ！」と、かの有名な精神棒の洗礼が行われたのである。

予てからこの精神棒の話を聞いていた私は、尻を叩かれることは覚悟していたものの、尻を出して受けてみると、それはじつに痛いものであった。

然し、一方叩く者も、分隊全員の尻を叩いて回るので、叩き終わるとフラフラに疲れるとのことだと、後日になって聞いた。

このような厳しい教育と訓練が進み、三ヵ月はあっと言う間に過ぎた。私は、専門兵科を通信に希望し通信学校へ入校することになった。通信学校に入って漸く日曜日に外出出来るようになったが、外出時間内ではとても山市場［神奈川県山北町］の実家へ帰って戻ることは出来なかった。

ある外出の日であった。京浜急行線の横須賀中央駅を歩いていると、偶然にも神縄［山北町］の杉山密造君にばったりと出会った。彼は僕よりも半年早い前期の入団であって、彼は主計兵であった。主計兵の外出は余り厳しくないようだった。聞けば彼は、度々神縄の家へ行くと言うことだったので、私は私物の交換とか連絡の用件を頼んだ。こんなことで密造君には随分と世話になり、本当に有難かった。

昭和十五年五月三十一日、通信学校を卒業する頃になると、密造君とは全然会うことが無くなった。多分彼は、艦隊勤務となり、何れかの艦艇に乗り組んで出動したのであろう。

大東亜戦争は終わった。

昭和二十一年復員して家に帰る。国敗れて山河あり、河内川と言う言葉どおり、河内川のほとりの谷間は昔のままの姿であったが、共に海軍へ行った杉山密造君は戻って来ない。聞けば昭和十九年二月二十日、外南洋の海戦に於て潜水艦イ号で戦死したと言う。私は、丁度その時は、トラック島に於て執拗な米軍の爆撃を受け逃げ惑い、生き抜いていた時であった。

振り返って見れば、昭和十九年二月十七日、米軍機動部隊のトラック島大空襲の時、島野環礁内で潜水艦ロ号二隻が撃沈されている。その後三日目に密造君の乗組んだイ号は外南洋の海戦で沈み戦死したのではないかと思う。潜水艦の行動は終始隠密行動であるから全然判らない。闇から闇へ、何時何処で、どうして不明になってしまうか判らないから、本当に哀れである。私は唯、密造君の霊安かれと祈るのみである。

二　通信基地設営

私は通信学校卒業に当って、希望する任地を南方洋上の島の通信基地をと申告していたので、昭和十六年五月三十一日に、第四通信隊に配属となった。第四通信隊、略して四通は、トラック島を基地とした内南洋方面の通信を受け持つこととなった。

梅雨の季節に入る前の六月九日、第四通信隊は、艦隊付御用船春天丸に乗り込んだ。通信基地設営の建築資材、通信機械・機器、付属設備の機械・機器を積み込んで、東京・竹芝桟橋を出発。この春天丸は、南方洋上の各島々に寄港し、糧秣・衣料・薬品・兵器・弾薬・燃料等の補給と新設の建設資材・関連機器と要員とを荷役し、下船させながら次々と島巡りして航行する。だが、米軍の活動している海域を回避し迂回したので、頗る日数が掛かった。トラック島へ到着したのは

七月四日のことだった。

私は海軍に入ったからといって、乗艦の経験が無かったから、梅雨前線下の荒れた海での船酔いには面食らった。本当にへこたれた。この船酔いは味わった人でなければ説明しても解って貰えないだろう。

しかし、船上で何か作業をしていれば船酔いを忘れるのであるが、残念ながら乗船中は何も仕事がなく、毎日甲板で寝そべっているだけであった。途中、名も知らぬ或る島へ寄港した時であった。パイナップルが一個十銭だったので大量に買い込んだ。船酔いで食事が不味いから専らパイナップルを食べたのである。不思議にパイナップルは日数が経つにつれて実が熟して食べ易く味が良くなったから、そればかり食べていた。

ところがトラック島へ着いた時には私は黄疸になって動けなくなってしまった。かなりの重症であったらしい。しかしその時、天佑神助と言うのだろうか、其処に清水村塩沢（しみずむらしおざわ）［現・山北町］出身の主計兵曹で井上粂一さんが居たのである。井上さんは、私を山市場の加藤であると判ってくれたので地獄で仏に出会ったような気持ちになった。井上兵曹は私を特別扱いにして、二週間粥食にしてくれたため黄疸は全治したのであった。本当に井上さんは命の恩人である。

さて、我々四通の隊員はトラック島へ上陸したけれど、其処には既設の通信設備がない。兵舎としてあてがわれたものは、かつて民家であった廃屋一軒だけであった。そこでトラック島に駐屯の第四施設部によって、春天丸から荷揚げした建築資材、機材で兵舎・通信隊本部が完成。我々通信隊は、通信機器の工作に掛かり、通信機を設置、補助ならびに付属設備も完成して通信機能が充実し、運用出来るようになった。

昭和十六年十一月二十一日、南方方面に於て第四通信隊は作戦に従事せよ。と命令が布達され、大東亜戦争開戦前に戦闘状態に入ったのであった。

三　ミッドウェー海戦風聞録

トラック島のように基地の通信隊は、軍艦・空母のように直接戦闘に直面しないから、海戦のように逼迫した実態は判らないが、交信・傍受の状況から海戦の実況を伺い知る程度である。

元第一機動艦隊の空母赤城の通信士小川兵曹が四通に転属になって来た。

彼は、空母赤城沈没前に赤城の艦長と退艦し生存した一員である。

通信士は、海戦になると艦長と終始行動を共にして、一刻も艦長から離れず無線の連絡と戦況の把握を的確にするよう介添をする役割を持っている。そのような訳で、彼は、ミッドウェーの海戦と赤城の最後に至る状況を詳細に把握し見届けた生証人であったのである。

海軍では、このような人物を何故か内地に還して勤務させなかった。

小川兵曹は、ミッドウェー海戦の状況の一部を次のように話してくれた。

昭和十七年六月五日、この日は快晴で海は穏やかで「ベタ凪」の状態であった。満を持して第一次ミッドウェー攻撃隊は、航空母艦加賀、赤城、蒼竜、飛竜を発進し所期の陸上施設を爆撃し、それぞれの空母に帰投した。

そして直ぐ第二次攻撃隊が発進する時であった。空母の上空には戦闘機の擁護を受けた敵爆撃機が飛来していた。将（まさ）に奇襲であった。

これらの敵機は、日本軍機が引揚げる時に追随して来ていた。第二次攻撃隊が飛行甲板に配置についた時、間髪を容れず攻撃して来た。空母赤城では敵の爆弾が飛行甲板に命中し忽ち火災を起こして火の海となってしまった。

我が海軍の電波探知器は、友軍機と敵機と識別出来なかったことにより、防禦の態勢がとれなかった。

赤城は、敵機僅か三機の攻撃で、しかも、三発の被弾で誘爆を起し火災炎上し、航行と戦闘共に不能となってしまった。また、同時に魚雷三発が艦尾に命中して舵がきかなくなり、同じ海域を旋回するまことに、情けない状態になってしまった。

赤城の艦長青木大佐は、航行不能になり戦列から離脱した艦の自沈を決意し、艦長室に入り自決をしようとした時、小川兵曹は、常時側近に居て無線の連絡をしていたが、艦長が此処で死んではこれからの海軍の重要な指揮官が居なくなってしまうので、艦長の自決を思い止どめさせ、無理矢理に室から引き出して離艦させた。

もうその時空母赤城は火の手が廻って収拾つかない状態で、やっとのことで脱出した。その時、艦内からは「君が代」の曲が流されているのが聞こえていた。

小川兵曹は、艦長と共に赤城に接舷していた駆逐艦嵐に移乗した。

赤城は燃えながら、スクリューは回転して航行している。このまま放っておくことは出来ないと駆逐艦嵐は、魚雷を発射して一撃で沈没させてしまった。駆逐艦が搭載している魚雷は、型が大きく物凄く威力があるものであって、目の前でそれを証明したのである。

それにしても、余りにも残酷すぎることであった。

（続）

（清水小学校昭和八年卒業生記念誌より転載）

生かされて
私の軍隊体験 (1)

磯部正人

哈爾浜での初年兵時代

昭和十六年一月十日、満洲第一七七部隊（歩兵第三十聯隊）要員として、山梨県甲府市にあった歩兵第百四十九聯隊に入営し、一月十七日真夜中に甲府出発、十八日東京芝浦港を出港、太平洋を航海し紀伊水道から瀬戸内海を通り、玄海灘に入り黄海を通って一月二十四日大連港上陸、満鉄列車に乗り一月二十六日早朝ハルピン着、同日歩兵第三十聯隊第十一中隊に編入されました。

こゝで芝浦港からの船旅について、触れておかなくてはなりません。乗船したのは大型の貨物船でした。五十年以上昔のことですので詳しく船名までは覚えて居りませんのですが、お許しを得たいと思って居ります。

その貨物船に乗り太平洋上で一夜を明かし瀬戸内海に入り、第二夜は午後十時すぎに関門海峡を通過いたしました。未だ太平洋戦争も始まっておらず、船のデッキから眺める下関の市街にはネオンが輝いて居りました。

これで内地の灯ともお別れか。いや生きて二度と、この海峡を通ることもないだろう。つい先日一月九日に別れた久実兄そして登兄そして三雄兄や妹二人。父母近所の人々。親せきの人達、同級生、恩師等々に心で別れを告げ、甲板上から小声で「さよなら」を云い船内に降りて行ったことを憶い出します。そうして玄海灘に入りましたが、内海とは打って変り冬の季節風の吹き荒れる海は、大荒れに荒れ甲板は忽ち波しぶきで凍りつき歩くのも危い始末でした。投光器に照らされて舷側に懸け出された仮設便所に行くのも必死でした。何しろ貨物船ですので船内には便所がありません。催せば誰も彼も舷側行きです。這うようにし乍らたどりつくと、申し訳程度の板囲いがしてありますが、踏み板が二枚だけで下は十数米の荒れ海です。誤って踏み外し海に落ちたら助かる目当てはありません。

ローリング、ピッチングに慣れぬため船酔する者が沢山居ます。船倉が三階位に仕切られて床板にはアンペラが敷いてありました。その上に毛布一枚を貰って雑魚寝をするのです。船酔いのため食事も中々のどを通らず頭痛はするし、それはそれは誠に苦しい船の生活でした。

一月二十四日に大連港に到着上陸して、始めての満洲の寒さにふるえながら、満鉄列車に揺られて、駐屯地である哈爾浜に着きました。丁度一月二十六日の早朝のことでした。

哈爾浜の冬は、とてもきびしく感じました。

何しろ初体験の零下二十五度から零下三十度の毎日でしたから。

初年兵は起床ラッパで飛び起きて、未だ暗い営庭での点呼に整列するまで誰よりも早く、しかも確実に身繕いをしなければなりません。もし古年次兵より遅れでもすると「おそい、このうすのろ、何をしとるんだ。そんなことで戦場に行けるか。」容赦のない罵聲が飛んで来ると同時にビンタが少なくても二発とんで来ます。痛みを覚えますが逆らうことは出来ません。軍隊は絶対服従するのが掟です。

川崎市出身の小金沢年男君は少し動作が遅くて他の初年兵より遅れることが多く、おまけに急激な生活環境の変化も手伝ってか時々失禁する事があり、そんなときは三年兵や二年兵からおこられ叩かれしてそれはそれは気の毒なことでした。彼は私が追撃第十三大隊に転属するより前に、他部隊に転属して行きましたが、その後どうしたでしょうか、無事に内地の土を踏むことが出来たでしょうか。

私より先に他部隊に転属したもう一人の初年兵さんに横浜市出身の岩沢俊夫君が居ります。何でも入隊するまでは、横浜市の繁華街伊勢佐木町でチンピラの生活をしていたと話していました。彼の動作は全く機敏でした。或る時二年兵にビンタを貰ったとかで、そのお返しに夕方陣営具倉庫裏にその二年兵を呼び出し、充分お礼をさせて貰ったよと聞かせてくれたことがありました。娑婆で鍛えているから、きっと相手を叩きのめしたのでしょう。その時は何のとがめもなかったようでしたが、やっぱり早く転属して行きました。彼もその後どうしたでしょうか。

毎日毎日が緊張と恐怖の連続でした。点呼が済むと週番上等兵の「飯上げ」の号令がひびきます。初年兵は何をするのも競走です。「磯部飯上げに行って参ります。」と誰よりも早く大声を張り上げて週番上等兵の指揮下に入ります。この声も小さいと何回でもやり直しさせられました。週番上等兵の引率で聯隊の炊事場へ隊伍を整えて行進します。途中で将校に遇えば週番上等兵の「歩調取れ」の号令で七、八人の飯上げ要員がタッタッタッと歩調を合せ、「頭右」の号令で歩調を取りながら頭を九十度右に向け将校の答礼を受け終って「直れ」の号令、そして「歩調止め」で普通の

歩き方に戻ります。一瞬の油断も許されません。それでも内務班に居て古年次兵に何か失敗はないかと鵜の目鷹の目で見つめられて居るよりは未だましなのです。こうして朝食にありつけるのですが、毎日の猛訓練で朝からお腹は空いています。初年兵は喰気一方なのです。所謂色気がないわけではありません。血気ざかりの青年ですもん。稀の休みに街に出れば、綺麗な娘さんを見ます。そしていいなと思います。精神異常を起こしているわけではありませんから。でも色気を出してはいけないのです。いや色気のことなど考える暇がないと云った方が確実かも知れません。起床、点呼、飯上げ、朝食、それも大急ぎで食べるのです。噛んでる暇はありません。味噌汁を御飯にかけて流し込むだけです。そして食器洗い、残飯捨て、食缶下げと手分けしてやっている内に、「演習整列」の号令がかゝります。靴をはき脚絆を巻き帯剣をしめ雑嚢をつけ三八式歩兵銃を引っさげて誰よりも早く舎前に整列。「気を付け」「右へ列え」「直れ」「番号」一二三四五六七八……こうして人員の点検が終わりいよいよ演習開始。基本から応用、そして実戦訓練を繰り返している内に「小休止」の号令が下ります。こゝで本日初めての煙草が吸えます。初年兵には寝起きの一服或いは食後の一服などは勿論ありません。古年次兵はそれを悠然とやっているのです。今日初めての煙草のおいしいこと腹の底まで吸い込み鼻から吐き出す紫の煙、あゝうまい!!何か生き返った様な気持ちになるから不思議です。未だ気温は零下何十度と下っているのに、寒さも忘れて煙草をむさぼり吸う姿は何と表現したら適当でしょうか。

こうして毎日毎日明けても暮れても訓練に次ぐ訓練。お腹ペコペコ。

それから内務班（兵舎内で日常生活をする最小組織で三十名前後の兵隊が一つの部屋で起居を倶にする）でのつらいつらい初年兵の生活の一端を書いてみましょう。

厳しい初年兵教育（入隊後約六ヶ月間）訓練と内務班での緊張した一日に終わりを告げる消灯喇叭＝私達はこの喇叭の節に合せて「初年兵はつらいよネー。又寝て泣くのかよー」と口ずさんでいました＝が吹奏されると、やれやれ今日も一日終ったと安心して藁布団に疲れた身体を横たえて、遥か故郷のことなど憶いながら眠りに就くのですが、突如大きな「初年兵起きろ」の声に魂消て飛び起きますと週番上等兵が入口に突っ立って居ます。何だろうかと訝っていると「お前たち防火用水桶の水は替えたか」とどなります。勿論新しい水を満々と貯め替えて寝たのですから自信たっぷりに「ハイ替えました」と答えますと「嘘を言うな、こゝへ来てよく見ろ、吸殻が浮いているじゃないか、これで替えたと言うのか」確かに此の手で重たい思いをしながら替えたし、桶も綺麗に洗ったのに変だな。

何のことはない。古年次兵が寝たばこを吸って吸殻を防火用水桶に捨てゝいるのです。わざとネ。吸殻入は班内のテーブルの上に置いてあるのに口惜しいったらありゃしない。そして次のいじめが始まります。「初年兵整列せい、貴様等たるんどる、気合いを入れてやる。おい二年兵起きて初年兵に気合いを入れろ」次に来るのは当然平手打です。軍隊ではビンタと云っていましたが、情容赦のないビンタを数発貰うと顔の感覚もうすれて腫れてしまいます。

さんざん痛められて漸く終り再び藁布団にもぐり悔し涙を流すのです。これで精鋭なる関東軍兵士が出来るのだろうかと疑問に思ったりもしました。まあ、完全なイジメですね。

やがて長い長い六ヵ月に及んだ初年兵教育が終り、一期検閲が済むと肩章にポツンと置かれた黄色い一つ星が二つ星になります。つまり陸軍二等兵から陸軍一等兵に進級するのです。

ほんとにほんとに苦しい苦しい六ヵ月でした。よくまあ耐えたものだとつくづく思いました。

前にも記しましたが、私も検閲が終るまでの六ヵ月の間に何十回となく殴られました。先を読む目は持って居た積りでしたし先手先手と動いたのですが、何しろ多勢に無勢と云うか、多くの古年次兵は、鵜の目鷹の目で初年兵の一挙手一投足を見守っているのですから、たまったものではありません。

或る日帯革でやられました。帯革と云うのは腰に巻くバンドみたいなもので幅五、六糎の厚い牛革で出来ており、これに戦闘時と云っても最後の白兵戦のときに小銃の先に装着して敵兵を刺殺する短剣を吊り、又小銃弾六十発を入れる弾入れを吊すものですが、この帯革で叩かれたことがありました。これで叩かれると頭の周囲を一周して巻付く様になります。そして立って居られなくなって、尻餅をつきました。私をやった某兵長（特に出身地と名前は秘します）は、ノモンハン事件の戦闘に参加したという大変気の荒い人でした。対面していて相手が右手に帯革を持って殴って来ましたので私の左の耳を直撃し、鼓膜を破られました。以来私は左耳が右耳に較べて難聴になって居ります。

こんな状態の中で悲惨と云うか気の毒と云うか可愛想と云うか、そんな誠にいたましい事件が起きてしまいました。岩崎君の兵舎脱走、列車飛び込み自殺事件

です。彼は横浜市の出身で入営までは満鉄の機関士をしていたと云う優秀な頭脳の持ち主でした。内務班では二年兵をはさんで私と起居を共にして居た戦友でした。演習訓練中にもよく私に「こんな軍隊生活は耐え難い」とこぼしてはいたのですが、まさか自分で命を絶つことまで考えて居たとは思いませんでした。

或る晩少し月明りがある頃突然居なくなったのです。便所とか探して見ましたが居りません。中隊全員が起こされて兵舎附近も探したのですが見つかりません。それではと云うことで軍用犬による捜索が始まりました。彼が使っていた敷布の臭いを嗅がせ軍用犬が彼の歩いた跡をたどって行ったのです。部隊の兵舎の周囲は高い赤練瓦塀で囲まれていて出入り口は衛兵が立哨しているので、とても外へは出られません。ところがやっぱり外に通じる所があったのです。

犬の嗅覚は凄いですね。赤練瓦塀の下の排水溝があったのです。人一人が這ってどうにか通れる位の大きさですが、彼はそこから外に出ていたのです。中隊兵舎からは、かなり離れていて夜中に探し当てられる場所ではないのですが、或いは切羽つまった気持ちで予め探していたのかも知れません。さあ大変です。捜索隊は軍用犬の先導で探し始めました。

道路から線路へ、そして約一キロ先で轢死体で発見されたのです。彼は厳しく苦しい軍隊の訓練と生活に耐え切れず、遂に自分が入営前何十回いや何百回となく乗務して通過したであろうその鉄路で、私達にも測り知れなかったいろいろの悩みや苦しみの解決を計ったのでした。色白で大きな瞳をした美男子だった彼の最後は余りにも惨めで空しい。けれどもそうせざるを得なかった彼の心の中を察して只々悲嘆にくれたのでした。

夏期演習、秋期演習、冬期演習これ等のつらい演習を済ませて漸く一人前の兵士として認めて貰えるのです。

（続）

酒匂か　それとも酒勾か
大正十二年六月竣工の橋を巡って

酒匂川を「さかわがわ」と読むのは、当然なことで少しも疑いを挟まなかった。しかし、最近酒匂川が「さかわがわ」と読まれない例に出会った。

それは、「道鏡を守る会」（宮城県古川市）の機関誌（94・12第12号）に、武相の郷土史の普及に努め神奈川文化賞を受賞した故・石野瑛氏の「千代古刹阯（千代観音）の考察」が転載されていて、その中に、酒匂川を「さこうがわ」というルビ（読み）がつけてあるのを見たからである。

勿論、編者の読み違いによるものであるのはいう迄もないが、その字をよく見ると、酒匂川が酒勾川となっている。酒勾という姓があるが「さこう」と読む。勾ならば「こう」と読む訳だ。それだけに、地名や人名など固有名詞の読みは、難しく間々誤ちをする。

かつて、ある講演会で、新名女学校（現・小田原市城内・旭丘高校）を「しんめい」女学校と呼んだ講師の方もいる。また、海釣りが好きな知人から聞いた話であるが、あるとき米神に釣に行く途中で、「べいじん」とはどの辺ですかと聞かれ、それが米神（小田原市）であるとすぐさま理解することが出来なかったと言う。

いずれも土地の人でないからだが、その誤りを笑う事は出来ない。

ところで本論の酒匂について、『新編相模風土記稿』を見ると、酒勾とあり、酒匂川には左加和可波の読みがつけられている。郷土史家の故・立木望隆氏は、『風土記』に記された通りに酒勾川の字を用いておられる（『郷土の地名』）。

一方、行政関連の文書や電話帳を見ると、酒匂という文字を使っている。

酒勾か酒匂か、その当否は別として、酒勾に代って酒匂の文字が当てられ定着するようになったのは、そう古い時代のことではなさそうである。

それを示すものに、大正十二年（一九二三）六月十五日付の横浜貿易新報の記事があるので紹介しておこう。

さかわはし

竣工する酒匂の題字に県当局窮す

本月中に竣工の予定だった酒匂橋は此の頃雨天多く露面の混凝土工事に遅延を来した為来月十日頃竣工式を挙げる事になって居るがさて此の橋の親柱に県知事が筆を振ふ事になったが酒匂の匂は勾とも書かれどちらが正確であるかわからず先年鎌倉の石橋筋違橋の筋の月を目に書いて地元の先生から酷評されセメントで塗つぶしたと云ふ不始末をやった例もあるので大いに県当局も苦心して古老に聴いたり書物を参酌したりして居るが一向要領を得ない相模風土記には勾・とあるから其の通りに決定しようかとの議も出たが結局『さかわはし』と仮名で書く事になり銅板に此れを刻む事になって居る。

（南里　哲）

訃報　立木望隆氏

6月11日㈰逝去されました。享年82歳。遺言により近親者による密葬が行われました。なお、氏は小田原史談会創設の功労者です。

小田原叢談（二十一）

石井富之助

御感の藤

五月三日の憲法記念日から五日の子供の日にかけて、大名行列を中心としたお城祭りが開催される。お茶壺橋の「御感の藤」が満開になり、長い紫色の花房を垂れるのはちょうどこの時である。

「御感の藤」についてはすでに詳しく紹介されているので今さらとりあげるまでもないことだが、古いメモを見ていたらまだ知られていない事実を発見したのでやはり書いておこうという気になった。

「御感の藤」の記録としては、大正九年六月発行の『小田原の史実と伝説』第一輯に「ゆかりの藤」という題で書かれているものが最もまとまったものといえるであろう。さして長いものでもないから、その全文をわかり易く書きあらためてお目にかけよう。

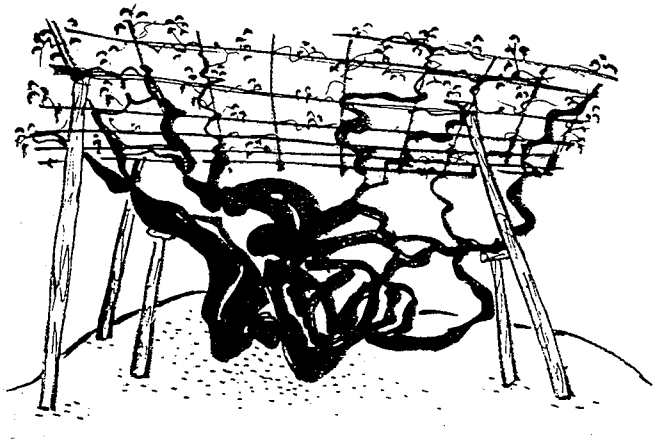
かしこくも今上陛下（大正天皇）がまだ東宮であらせられたころ、小田原の御用邸をお出ましになり、御供の者二三名と馬で小ゆるぎの浜から町中を御逍遥になった時のことである。唐人町の西村元吉氏が愛していた藤棚の前にさしかかった。馬が何を感じたのか、手綱の御手がゆるんだのか、突然今を盛りと咲きほこる藤の花の下へ入ったので、宮の御肩のあたりから帽子のひさしまで花がふりかかり、ゆかりの色の花びらに錦の衣着て帰ると古歌に聞いた交野の春もしのばれるようであった。お付きの人はもとより、家の中から飛び出した西村氏もびっくりして、高貴の御身とは知るはずもないが、とっさに馬のくつわを押え、おけがはなかったかとうかがうと、宮は苦心の花に心ないことをしたとおねぎらいになり、ふりかかった花びらを拂い、しずしずとむちをあげられたということである。しかるに、このゆかりの深い藤棚も、西村氏が眼病で失明され起居が不自由になるにつれ、今はただ枯死を待つ有様となったことは遺憾千万である。

西村氏の談によれば、もとこの藤は板橋見付ぎわの森元市蔵氏が大久保家から頂戴して鉢植えとしたものを、見付の土手に植えたのが木の性に合い、だんだん繁茂してきたのを見て、同氏がいくらかの金子を出してもらい受け、現在の場所に植えかえられたのが初めで、ちょうどそれが明治十六年ごろだったということである。植えかえにとび職二人で運搬したという話だから、当時それほどの大木ではなかったらしい。それが五六年の後には小田原名所の一つに数えられ、遊覧客が絶えなかったというまでにした同氏の丹精は想像以上であったろう。江戸の亀井戸、粕壁の文福寺の藤よりも花房が長いので、観覧客は一々ものさしではかって帰ったということである。長いのになると二メートルもあり、一メートル五十ぐらいは普通であったという。

以上が「御感の藤」の基本資料で、どの本の説明もこれを引用して書かれている。ところがわたしのメモによるといくらかの相違がある。

昭和十八年五月十八日のことである。片岡永左衛門、松隈義旗両古老が図書館でばったり顔をあわせ、雑談をしているうちに、話題がたまたま「御感の藤」に及んだ。

二人の話では、皇太子がこの藤をおほめになったという事が伝わっているが、その一番のもとは西村氏の妻女で、それが口から口へとひろまったのだという。藤の来歴については、唐人町の西村氏以前には郡役所（今の合同庁舎）の向い側の料亭ちんりう事



カット　内田美枝子

西村紋弥方であったのが明治二十年ごろで、それより前明治十年ごろには板橋見付海側の松本長太郎という人のところにあったのだそうである。　ここまでは片岡、松隈両老の記憶がはっきり一致した。そして、さらにその前は小田原振興会の主事をしていた小幡文蔵の家にあったと思うが、これはどうもはっきりしないということであった。

おもしろい話なので、わたしはその場でメモをとっておいたのである。

西村元吉談では明治十六年ごろ森元市蔵からまだあまり大きくない藤を買ったといい、片岡、松隈両老の方はちんりう、松本長太郎、さらに小幡とさかのぼっている。

西村談の方は大正九年に藤の所有者である本人に直接あって聞いた話だから、まず信用できると考えられるのだが、これはあとでしるす樹齢で合致しない点がある。片岡、松隈両老の記憶は松本家所有の藤だったというところまでは完全に一致しているし、樹齢から見るとこの方があっているようである。だからといってこちらが正しいと断定するにはやはり不安がある。こうなるとどちらが本当かわからなくなるのである。

お二人の話はさらに続いて田広勝三氏のことに及んだ。

大正十一年三月に西村方から現在の場所へ移植したのは小田原保勝会のやったことで、その時の監督は、尾崎亮司氏が上京して留守だったため、田広氏がすべて処理した。移植を請負ったのは伴野徳平という植木職で、その経費二十五円は尾崎氏の私財でまかなわれた。二宮神社寄りの細い一本は田広氏がその時寄贈したものであるということだった。

田広氏は当時御幸町の御幸座から四五軒北側に牧舎を持って三光舎という牛乳屋をやっていた。小田原保勝会の会員で、また町会議員として活躍された人である。

ふだんはあまり気にもとめなかったことだが、こういわれてみるとなるほど藤は三株あり、現在ではそれをひっくるめて「御感の藤」と呼んでいるのである。

ここでまた疑問がわいてくる。東側のが西村、西側のが田広の藤だということは間違いないのだが、それではまんなかのはどこからきた藤なのか。これについては片岡、松隈両氏もまったく触れていない。西村談によればもと鉢植えだったものを森元から買ってきたといっているところからみて一本だったように思える。どうもこの辺のところがもう一つはっきりしないのである。

「御感の藤」は昭和七年五月に天然記念物に指定されている。そのころはまだ県も市町村もそういうことは行っていなかったから多分国の指定であろう。このことは昭和八年調べの『小田原町勢要覧』にもしるされている。それがいつの間にか消えてしまって、昭和三十年三月三十日に小田原市の天然記念物として指定されている。そして、これについては昭和三十二年発行の『小田原の文化財』に、昭和七年指定ということに関してはそれを裏付ける証拠がないといっているのである。

「御感の藤」の大きさ、樹齢等については昭和三十六年三月三十日発行の『小田原の文化財』には次のように書かれている。

藤の三株（仮にA株、B株、C株と名付く）

藤棚　東西三十三米、南北十三米、高さ三米、棚下面積約四百三十平方米、支柱はコンクリート、棚の横棒は竹を以てする。

藤A株　東側にあって樹齢約百五十年、根元より二枝に分る。根本が直径七米半、中央部の高一米位の円形の土盛で囲まれているので樹根の大きさを見ることができない。

大枝周囲二米二十糎（盛土の上にて）

小枝周囲一米六十糎（盛土の上にて）

大枝、小枝ともに更に数本の枝に分れ斜上に延びて棚上に拡がる。大枝には可成に老朽腐敗した個所がある。

藤B株　中央より梢西側にある。樹齢凡そ百年。根元より四枝に分る。

藤C株　西南端にあって樹齢約五十年。目通り周囲八十糎ある。

それから十三年経った昭和四十九年三月発行の『小田原市文化財調査報告書(十八)小田原の天然記念物――樹木――』にはA株の樹齢百七十年、B株百二十年、C株七十年となっている。

そのどちらをとっても樹齢からみると西村元吉談が少々怪しくなる。

「御感の藤」にはこういうふうにいろいろ疑問の点があって、今となっては、それを解明することはむずかしいようである。

そんなことを一々詮索する必要はあるまい。みごとに垂れ下がった紫色の花房が風にゆらいでいる美しさ、その花を仰いで楽しんでいればそれでもよいではないか。

まさにそのとおりであるが、それにしても今目の前にある藤にもこんなに不明の点がある。小田原の草木、自然をはじめとして人間自身のことも、これと同じようにわからないことばかりといってよさそうで、歴史とはむずかしいものだとつくづく思うのである。(続)

震災日記 ② 片岡永左衛門

大正十二年 九月二日 晴

早朝、清吉棺弐個を持ち来る。埋葬は、明日午後まで親一［永左衛門の長男］等の来着を待つ事とし、埋葬の手続に奔走し、診断の医師は、警察より午後までに来る相談をなし、大蓮寺［小田原市南町二丁目］に至れば、本堂は全潰、庫裏は半潰、各墓標は押し倒れしも、拙者の先年建立せし萬霊塔は、少しく動きしまでにて、巨大なるも倒壊を免れたり。

住職に埋葬諸事の打ち合せをなし、行員篠窪行雄方には、老人と産婦のありしに気付き回り見れば、家は半潰にて負傷も幸になし。

山角町に至れば、全潰半潰何処も同じ。小西にて罐詰一個をようよう買い求め帰宅し、停車場辺に至れば、京浜の被害も幾分知り得るかと行きて見れば、この辺は、倒壊せしも焼失せざれば、避難者に停車場荷物は食品に限り、自由に諸人に解放すとの風聞に混雑するも、京浜の情報は不明なりしに、避難者中に知己眼科医五十嵐力君の夫人と子供一人、下女二人あり。

これも借宅丸焼に加へ、君は、昨日朝上京中にて、安否の程も知れず、途方に暮れる様子なるも、拙宅は、未だ膝を容れる仮宅も出来ざれば、連れ来るも得ざるに見れば、この炎天に冠る物も無し。

拙者の冠り居りし麦藁の海水帽を脱いて、是にても差し出しせしに、足袋の不用も有らばと乞われしも、差し当り困りたれば、履き居りしを脱ぎて差し出し、立ち帰りて握り飯を下女に持たせ遣わせしも、食物総て不足の時なれば、充分には心に任せざるは止むを得ざりし。

午后、大蓮寺上人来り、露天にて読経せるも、未だ医師来たらざるに、足柄病院長岡田氏の子息実君見舞に来りたれば幸いと、診断書の依頼を伝言す。

なお、京浜の安否もと再度停車場付近に至るも不明なりしが、カフェーレゾートの前に来れば罐詰あり。買い受けを交渉すれば、売り値なれば差し上げるも、食用に不足なればと応諾せず。強いて懇願し、今口を切りしカルルス一罐を貰い受けしが、場合により、かくも心の賤しきかと、自分ながら呆れはつ。

薄暮、岡田小三太君は、不自由の身を実君と看護婦の肩に縋りて来診、拙者の手を執り無事を悦び、同家は、長男豊副院長等三十五人死亡せりと。互いに涙の内に談話したり。

昨日の火災は、中宿町中程より以東万町中程まで、裏町は、代官町以東万町中程裏まで、青物町より左右竹の花・中新馬場入口迄を焼き払い、凡て町中の四分三に及び、山角町・筋違橋・欄干橋・茶畑・中宿の中程の左右、西海子・御花畑・新久・早川口・幸田・弁財天・停車場付近・竹の花以北・七枚橋付近・新宿・古新宿を残し、午前三時頃にもはや鎮火せるも、余燼は中々終熄せず。

三日夕刻 小雨

東京より来らざるも、止むを不得両人［孫二人］を大蓮寺に埋葬する事とし、拙者、淳子と来合わせたる村瀬と三人にて送る。

俄に降雨となり、寺より一足先に淳子を返せしに、洋傘を傾け寺門をいで行く後ろ姿を見れば、哀れにも憔悴し、暗然たり。

町役場は、御用邸の正門前に纔に卓子を置き執務すると云うも、只呆然として何も手に付かざる様子なりしが、今日は高等女学校の敷地内に移り、昨日午後不取敢通商銀行の倉庫の在米五百俵を町に買い受け、壱人玄米二合宛を施米し、町民の飢えを凌ぐ事となせり。

今日も、停車場より食物已ならず諸品掠奪し、古新宿の漁民は、材木などを手当り次第に持ち去り、甚だ不埒なるも、此の際にて警察署も制止する者無く、後には付近の商家迄も掠取せられたりと。

午後よりは、横浜監獄を開放せられるたる邦人、朝鮮人、社会主義者と合同し襲来し、毒薬を井戸に投ずるとか、掠奪殺害するとの風聞盛んとなり、各区俄に竹槍を作り警戒に努め、人心恟々とし、まさかと思いしが、婦人十一人は半潰の物置に、男五人と清吉は今日出来し亜鉛葺きの四坪ばかりの疎造の仮小屋に、棍棒等を備へ、灯を消し、人語を絶ち閉居せしが、市中よりは警戒の振鈴も聞え、不安を感じたり。

東京の消息は、不明なるも、風聞甚だ悪しく心痛この事に集まり、龍夫も悲観

震災で倒壊しなかった片岡永左衛門寄進の萬霊塔

し、東京は家族全滅として後来の方針を予め定むるの要ありと云へるも、当地も如何に成り行くや、銀行も営業開始の見込みも付かざる場合には、一家を離散し、龍夫は大阪なり何処かに求職し、拙者は淳子を連れ三人にて出来得る限り生活する事と、老妻涙子に不安を与うるに忍びず、密かに龍夫の意思を探り決心はせるも、甚だ心細き限りにて終夜眠りにも入れず。龍夫も安眠を得ざりし様子。

四日　晴

大蓮寺に墓参せしに、境内に借地せる東京人大澤某より、通信未開に付き自転車にて、東京の事務所に特使を遣わす由に付き、親一及び会社に安否聞き合わせの書状を依頼す。

神奈川県に戒厳令施行せられ、十五師団司令部を小学校焼け跡に置き、小田原警備隊司令部も設置となり、死体の発掘等にも従事し、市外にては架橋も始めたれば、警察の不備にて不安を感じたるも、是にて安堵せり。

小田原警察署は倒潰し、小田原区裁判所は焼失したれば、箱根口内御用邸裏門前に、一日より警察署、小田原区裁判所検事出張所とをテント張りにて仮設し事務を取り扱えり。

電気会社製氷部の貯氷は、諸人の争って自由に取り来たりしが、本日よりは医師の証明にて病人に限り警察署の許可以外は禁止となれり。

保勝会は、警察署の証明書を持ち、会員河部潤三、倉橋某を慰問品募集の為、大阪方面に出張せしめ、物資の供給に尽力せり。

今日も幾度も親一方の安否を言い出しては、四人共に憂愁に沈み、夜も焦燥し、安眠を得ず。

五日　晴

仮屋に畳六枚を敷く事出来、幾分寛げり。

兵庫県赤十字支部、医員看護婦来着、治療を開始せり。

六日　晴

汽車未だ不通なれば、自転車にて親一より無事の使い来る。一同の喜びは譬うるにものなし。東京にては当地の震害をこれ程とは思わざると、通信交通の不便の為に延引し、大澤氏に託送の書状にて、始めて詳細を知り驚きしも、書状の様子にては姉妹の変死は却って奇異を感じたる如し。

午後四時、工兵少尉山崎武夫君東京より来り、これも亦、親一方の無事を報じ、仮宅に止宿せり。

今日は始めて食物に味を覚えたるが、拙者は已に非ざるべし。

震災の夜を思ひて
大地震にたけりて燃ゆ
るまっか火のほのをの
上に澄める月かげ

一木喜徳郎氏夫人と子息令嬢は、避暑　別荘に滞在中、此の大震となり、家屋は全壊せしも、鉄道は破壊し交通不便の為帰京するを得ざる已ならず、東京の消息も不明にて進退に窮せらるれしも如何ともし難く、一日一日と送り居りしに、今日漸く東京より自轉車にて使い来り、東京は安全なりしも汽車の何日頃開通するの見込みもなく、止むを得ず箱根を越え沼津に出、中央線に依り帰京と決し、今朝歩行にて一行出立せり。

震災以来、鉄道の開通せざれば、京浜より帰国する者出先きより帰京するは、箱根越えにて山中も旅人の往来多く、菓［子］食物を売り不当に利を得し者もあり。当町も避難者の婦人子供を連れ重荷を負い、疲労の足を引き行く幾組も見受け、旧時代の感あり。

七日　晴

今朝五時、東京の使者に書状を持たせ帰す。

当地銀行協議会を停車場の客車内に開き、其の善後策として金融を其の筋に請願の為、小田原銀行・通商銀行・足柄銀行の三行は、横浜に出発する事となれり。

八日　晴

墓参りし、大澤氏に東京に書状託送の礼に寄り、巻紙を送る。帰途身体に異状あり。岡田氏に診断を受けしに疲労なるべしと服薬す。

今夜、仮宅に畳も敷き増し出来、畳の上に手足を伸し安眠。

九日　晴

昨日、大船迄汽車の開通し、親一、三時頃来着。一同大喜び。今夕、始めて純白の飯に鮭の罐詰を切り、葡萄酒を抜き祝杯を挙げたり。大牢［立派な食事］の珍味も是には過ぐべからずと思う。

十日　雨

午后下女君江の親父、大島より水雷［艇］風早にて東京に便乗し、汽車不通道路不便と聞き、八王子を迂回し来る。大島は震源地の風聞にて、全島全滅し或いは死亡せしかと思いたる親に面会し、親子抱擁し声を放って泣く至情、然も有るべし。柳川弘氏来診。

陸軍警備司令部にて自動車を徴発し、大船小田原間の所々にて区二、三里間宛て、婦女その他必要と認める者は無料にて交通の便謀られ、諸人大いに喜べり。

（続）

（編集付記）

今回は、『駅鈴余音』に載る震災日録は、『片岡日記』に較べ、省略された箇所があるので、その箇所は、『片岡日記』を引用した。

なお、読みやすくするため前号と同じように①旧仮名づかいを現代仮名づかいに改め、②句読点を整理し段落をふやし、③［　］で言葉や意味を補った。

震災余話

市川一郎

今回の阪神大震災で、土地が軟弱だとか手抜き工事のために、建造物の被害が多かったこと、また「家は焼けてもローンは残る」等をテレビ・新聞で見聞きして、思い出した事があるので紹介する。

一　七十年前に聞いた話

その一　地盤沈下

小田原電気鉄道株式会社（小田電）が、関東大震災で経営困難に落ちいっていたとき、昭和三年一月日本電力㈱（東京電力の前身）に吸収合併された。日本電力㈱は大正中期創業で大阪に本社を置き、黒部川水系に発電所を持ち、阪神方面と京浜地区の大口電力（五〇キロワット以上）に供給していて、関東地方に供給区域を拡張しようと虎視眈々としていた。

筆者は当時小田電に就職しており、電気関係の資格試験の受験勉強中であったので、日本電力が横浜市潮田に建設した火力発電所を見学したいと思い、本社から技術課長として着任された、藤井立志技師に見学の紹介をお願いした。その時の話に、

「日本電力が予備発電所として尼崎に建設した火力発電所（出力失念）は、設計段階で地盤沈下を想定し、設備全体を地表から一メートル位高く施設したが、現在外部から一メートルぐらい沈下し、階段で発電所に出入りしている。また建物が水平に沈下しないので、回転機器は必要に応じて水平になるよう修正をしている。

潮田火力発電所を作る時は、地盤を外部より高くし、さらに機械、器具の重心を調べ、機器の配置を重心に対し対称になるように施設したので、毎月沈下量を測定しているが、前者のような心配はない。」とのことだった。

見学裏話

発電所に行く道筋の所々や、屋根に灰のような物が積もっていたので、所長に尋ねると、燃料が微粉炭（石炭を粉にしたもの）で、機械と電気の集塵機を使用しているが、強制排風のため完全に除去出来ないので、近所の方々に迷惑をかけており、洗濯は岡から海に風が吹いている日にされてるようだ「付近の人は灰が目に入って目医者に行くことが多いので「発電所は目医者から賄賂を貰って灰を出しているとと皮肉られている」と話された。

筆者註　今の発電所では設備が改善され、このような心配はない。

その二　竹筋（ちくきん）の話

『小田原史談』一五八号で紹介した関東大震災に関する話の続きだが、前回紹介した神保技手に聞いた話である。

三枚橋発電所と平塚変電所間二万ボルト送電線の鉄塔が関東大震災で倒壊し、基礎のコンクリートが破壊され、鉄筋ならぬ竹筋が露呈した。そのため此の工事請負者が施工した基礎は全部破壊検査した。

当時、神奈川県下で、全部現場打ちのコンクリート柱で六万ボルトの送電線を工事をしていた、大同電力㈱?でも此のような話があったそうだ。

二　五十年前に聞いた貸金棒引きの話

太平洋戦争の終戦後、工業塩、食塩が極度にひっ迫したので、大蔵省の後援もあって各所の海岸で、製塩事業が盛んに行われた。燃料は皆無に近く、これに引き換え電気には余剰があったので、所々の海岸に電気製塩工場が出来た。

筆者は当時関東配電㈱（東京電力㈱の前身）に勤務しており、電力使用開拓の業務に就いていた関係で、各所の電気製塩工場に出入りしており、或る工場のK社長とも面識があった。ある日雑談の末、身の上話に移った時K社長が「市川さん日本中で貸金の証文で鼻をかんでる人は居ないでしょう」と言われた。その訳を聞くと、

私は家が貧乏で苦学（アルバイト）をして東京帝大（東大）土木科を卒業した。在学中に利根川の氾濫を防止するための水利事業について、内務大臣に建白書を提出した。その関係か卒業後内務省に就職し、道路工事の現場監督をやらされた。土木屋さんの儲けの多い事を知ったので、自分で土木工事の請負業を始めたが、思うようにゆかず、資本を食い潰し、高利貸に追われる身になった。

今度は高利貸に成ろうと決心し、身近な人に小額の金を短期間融資し、元利を毎日集金して資金の増加につとめた。だんだん貸金の口数も多くなり、人手が不足してきたので、自分の経験を生かし苦学生を雇い、通学時間を充分取れるように約半日分の仕事と自転車を貸し与え、集金時間は本人に任せた。事業も順調に進展し昭和二十年の初めには、学生が二十人ぐらいと、未払いを整理する法律に詳しい専門の係が二人居るようになった。

昭和二十年三月の東京大空襲で市内が炎に包まれ、夜空をこがす様子を郊外の自宅で見、この困難の時、貸金の督促は出来ないと廃業を決意し、所在の判明した雇い人には手当てを支給して解雇した。その貸金の証文がこれだよと二十㎝位の和紙の山を見せられた。

何時も和紙で「こより」を作って居られたが、証文とは知らなかった。

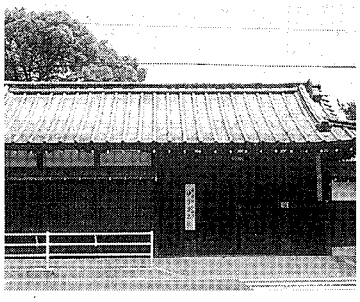
当時苦学生で美術学校の学生が現場で一人働いて居り、社長の話に嘘はなかった。

川邊本家物語り (3)

川邊(かわべ)　昴(たかし)

文政五年（一八二二）十一月十六日、還暦を迎えた七代目段右衛門家勝が隠居して、家督を長男家政に譲ろうとした際に火事を出し、川邊家の家屋は全部焼失し、先祖伝来の宝物や証書類もことごとく焼いてしまった。時に、家勝六十一歳その妻市子五十九歳・長男家政三十六歳その妻紋二十六歳の時であった。しかし、不幸中の幸いに、隣家に類焼することなく、再建に専念することが出来た。

時に栢山村の二宮尊徳は、役人として登用され、桜町の復興を命ぜられて、任地の桜町にいった年であった。そこで尊徳の桜町仕法がなされるのである。焼失した川邊家の再建については、隠居した家勝と八代目段右衛門家政とが充分協議の末、大農家に適合し、しかも大家としての風格を持つ家屋を考えて新築に全力を尽し落成したのは翌文政六年の暮れであった。これが現在の「ゆりかご園」である。



ゆりかご園

文政六年（一八二三）大きな母屋敷を新築したことに続き、離れ屋敷や石倉を新築して村人に川邊家の財力を示したものの、川邊家の蓄財は大きく傾いたのである。

文政十一年（一八二八）七月二十一日、八代目家政の妻紋は、続く新築の疲れがもとで三十二歳で病死した。四十二歳であった家政は、再婚することとし、高座郡門沢橋村の神部三左衛門の娘恵（二十七歳）を娶った。

天保元年（一八三〇）長女伊代が生れた。伊代は長じて東京堀江町の和田直兵衛の長男に嫁いだ。家政四十六歳の天保三年十二月二十日長男が生れ、名を清次郎と名づけた。これが後の九代目段右衛門家明である。そして、次女シゲが生れたが、シゲは早逝した。

天保四年（一八三三）から数年の間、天保の大飢饉があった。ことに天保六・七年はひどく餓死する者も多くあり、小田原領内の作物は殆ど出来ず、領民は威張山(いばりやま)の樹皮を食する程であったと云う。川邊家に於いても立派な屋敷は出来たものの蓄財をなくし、加えてこの飢饉によって困窮の度を増した中で、天保十年一月二十三日八代目家政は父家勝より先だって五十三歳の生涯を終えた。この時、七代目家勝は七十八歳で老いて益々元気であり、家政の妻恵は三十八歳、長男清次郎は八歳であった。そこで、家勝翁が中心となって節倹につとめ、日夜孜々として開墾に励み家運の恢復をはかった。

弘化四年（一八四七）清次郎は成人して十六歳になったので、七代目家勝翁は、正式に清次郎に家督を継がせることとした。清次郎は名を段右衛門家明と改めて川邊家九代目となった。この九代目家明は、天性英敏で強い精神力の持主であり、困苦に耐えて着々と家運の隆盛を築いていった。

嘉永元年（一八四八）幕府に海岸防備の勅命が下り、小田原藩では江川太郎左衛門の門弟の指導で小銃による海岸実戦訓練を行い、翌嘉永二年、伊豆下田に外国船が来るに及び大砲の鋳造を始め、嘉永三年海岸に三つの台場を築いた。上の台場（荒久）中の台場（御幸浜）下の台場（袖ヶ浜）であり、ほかに大磯照ヶ崎と真鶴岬にも台場を築いた。これを小田原五台場と云う。

嘉永六年二月二日、小田原大地震（天明の地震から七十二年目）があり潰家二千二百戸・死者七十九人・傷者七百人の被害があった。これに加えて同年六月には、ペリーのひきいた米国艦隊が浦賀に入港して世は物情騒然たる有様であり、物価は上り庶民の生活もしにくくなった。

こうした中の安政元年（一八五四）三月二十三日剛力で知られた川邊家七代目家勝は九十三歳の生涯を終えた。時に、九代目家明は二十三歳の独身であり、母恵は五十三歳で元気であった。そして更に、同年七月には酒匂川の大洪水、十一月四日東海地方の大地震により小田原領民の被害は大変なものであった。安政三年十月二十三日封建社会の中で農民の生きる独特の仕法をあみ出した二宮尊徳は、小田原藩に多くの実績を残して七十歳で逝去した。

来るべき激変を前にした幕末社会は、安政六年（一八五九）の安政の大獄、万延元年（一八六〇）の桜田門外の変、文久三年（一八六三）の薩英戦争、慶応元年（一八六五）の幕府長州征伐、等によって騒然としていた。川邊家九代目段右衛門家明は、たび重なる天災や変動する世情の中にあって、家業の農業に精を出しながら将来を冷静に予測することに余念がなかった。そして、元治元年（一八六四）三十二歳となった家明は、母恵（六十三歳）の努力によって淘綾(ゆるぎ)郡山西村（二宮町）の西山藤八の長女菊と結婚した。この菊の兄弟には、つたや旅館の西山藤八・允呉服店の添田利次がいた。そして、慶応元年

（一八六五）長女〝やす〟が生れた。これは後に高橋仲次郎に嫁いだ。慶応三年には長男新造が生れたが、これは早逝した。

慶応三年（一八六七）十月十四日水戸家出身の十五代将軍徳川慶喜は遂に大政奉還を決意した。そして同年十二月九日小御所会議で王政復古の大号令が出されたのである。その年の十二月三十一日、小田原藩では再び大火があり、明治元年の正月は藩主への年賀や松原神社の祭礼（一月十五日）も中止され、住民は来るべき争乱を予想して荷物の疎開を始めたのである。時の小田原藩主は大久保忠禮であり、明治元年を迎えた川邊家は、九代目家明三十七歳・妻菊三十歳で二児の親であり、母恵も六十七歳で元気であった。

五　川邊家栄光の五十年

明治元年（一八六八）四月、征討大総督有価川宮熾仁親王の軍が西郷隆盛を参謀として江戸を目ざして進発した。小田原に到着すると藩主大久保忠禮は朝廷に礼をつくし自ら警備の指揮をとった。しかし、小田原城内には佐幕派も多く征討軍が通過後激論が起り、藩論は二転三転した。結局、朝廷側に立つことになり、江戸からきた佐幕遊撃隊と湯本山崎の戦が始まった。これを戊辰箱根戦争と云う。小田原藩はこの遊撃隊を撃破したが、藩主忠禮はこの不始末で退き、同年十月荻野山中藩より大久保岩丸が新藩主として着任した。

明治元年十二月八日、九代目川邊段右衛門家明に次男が生れ正之助と名づけた。これが後の十代目正之助家信である。九代目家明は、七代家勝が開墾した農地を基礎に生計を立てていたが、明治政府が発足し、太政官札が発行され商法大意が布達されるや、いち早く政府の意図を悟り、農地売買の禁が解けることを予測して、川邊家の農業の企業化の構想を練り始めていた。

明治二年（一八六九）、大久保忠良が藩主をつぎ、六月版籍奉還が行われて忠良は藩知事となった。明治三年忠良は、新政府に小田原城の廃城を願い出て許されるや同年十二月天守閣やその他の櫓が取りこわされてしまった。

明治四年七月、廃藩置県により名実共に藩政の機能を失なって小田原藩は、二百八十年の歴史に終止符をうち明治の新政に入った。大久保忠良は藩知事をやめて華族となり東京に移住した。この廃藩置県は、新政府の統制力を強くするために藩主と領民を切り離し、藩兵を解散させて、全国の年貢を政府自身が徴収しようとしたのであり、これにより小田原藩は小田原県と名称をかえた。

当時は全国三府三百二県であり、現在の神奈川県の範囲には神奈川県・六浦県・荻野山中県・小田原県の四つがあった。そして同年十一月には、小田原県・荻野山中県・伊豆を合併して足柄県となり、県庁は小田原城二の丸に置かれ、参事に柏木忠俊が着任した。この時、全国三府七十二県となる。

明治五年（一八七二）二月、田畑永代売買禁止令の解除、明治六年、地租改正条令、円単位の貨幣条令の公布、諸物価の高騰等農家経済の激変期に対応し、川邊家九代目段右衛門家明は、経済活動を開始し、十町歩（三万坪）に及ぶ農地と屋敷内の石倉庫を利用し、穀物を貯えては機に応じて売却し、これを農地の買収に投資する等により農業の経営規模を拡大し、十数年にしてこの地方随一の大地主となった。

村人は家明の活動について「先を見ること百発百中、而して進退神の如し」と評し、畏敬の目で見たのも無理からぬことで、明治二十七年家明が生涯を終るときにはその所有地は五十町歩（十五万坪）に及ぶ程であった。

また、家明は子沢山であり、長女やす・長男新蔵・そして明治元年正之助誕生後、三男文之助（早逝）・四男桃三郎・次女ふみ（後に雨宮家に嫁ぐ）・三女さと（後に高山家に嫁ぐ）・五男幸太郎（後に石倉家養子となる）・四女とく（早逝）の五男四女の子を持ち、川邊家は名実共に大飛躍を果したので、九代目家明を川邊家中興の祖と称している。

話は戻るが、明治五年七月全国に学制が領布され各村に小学校が設置されることになった。戊辰箱根戦争で大きな痛手をうけ、すべてが時代の転換期に立たされて城下町宿場町の生活が一変した小田原藩は、藩校集成館の改革を余儀なくされ、明治四年には一般庶民の入学も認めたものの、この学制の頒布に当り集成館は廃校となった。

しかし、明治四年十二月足柄県権令となった柏木忠俊は県内の教育に特に力を入れ、廃校となった集成館を継ぎ、共同学校（中学校）と日新館（小学校）を開校させた。

また藩校以外では、明治五年八月二日この附近（現在の足柄上・下郡）の最初の学校として酒匂村に小学校が設けられ「崇広館支校」と称し酒匂村長楽寺を仮校舎として小学校教育が始まった。この崇広館支校は、明治六年（一八七三）の学制改正により「第一大学区第二十八中学区第四十二番小学崇広館第二支校」と名を改め、同年十月には川瀬庄右衛門宅（現在の小田原市酒匂五四二七）を校舎として借用し、ここで明治十九年迄十三年間小学校教育がなされた。明治元年に生れた十代目川邊正之助とその兄弟も少年期には此の崇広館第二支校で勉学した。

（続）

古文書講座12

造酒屋出店証文写

内田　清

小田原領の酒事情

農民を自給自足の年貢生産者と見た徳川幕府は、寛永十九年（一六四二）村むらでの造り酒と酒売買を禁止し、以後基本政策とした。しかし足柄両郡では、現実無視の幕法が小田原藩の修正によって、農家の副業としての造酒即酒小売りの形での酒屋を基本として展開する。

天明八年（一七八八）の調査によると両郡では、四十九軒が営業し、酒株を持ちながらも八軒が休業していた。現在の酒造業者七軒と較べると八倍もあったわけである。またこの調査の酒造米高合計約六千石は、必ずしも実際の数値では無いが、当時の両郡内藩領の穀物生産高の約九分の一に当った。従って藩は米の不作年に酒造制限を行い、豊作年に酒造奨励をし、他領からの酒移入を禁止した。酒屋は幕藩の政策と業者間競争、未熟な技術のため盛衰の激しい事業だった（瀬戸崎雄著『金井島の研究』参照）。

日野屋と酒造り

日野屋は近江日野出身の塗物行商人だったが、初代兵右衛門が享保三年（一七一八）御殿場に店を出し、穀物・茶・呉服と扱い商品を広げた。

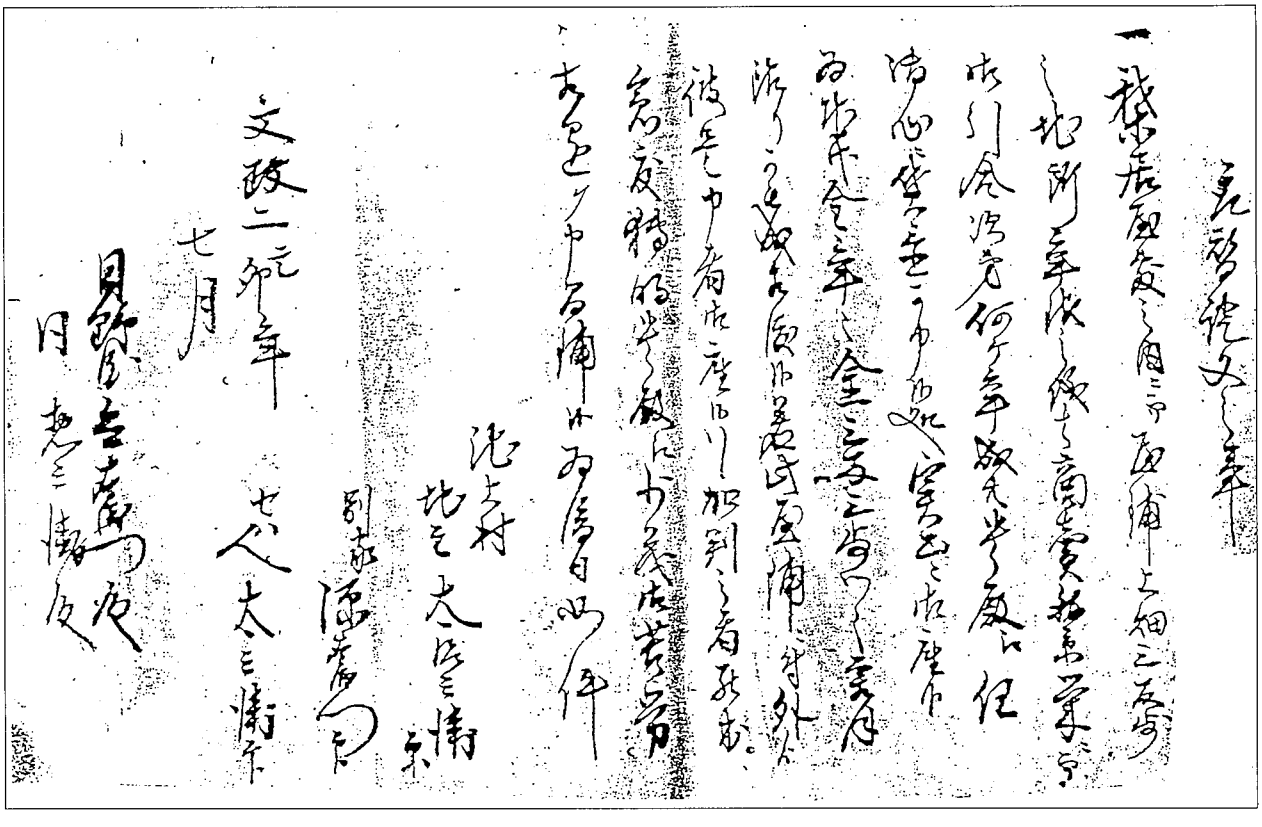
三代兵右衛門は酒造りに進出し寛政十二年（一八〇〇）に御殿場店を、続いて文化九年（一八一二）に関本店を開いた。しかし関本店は屋敷が狭く、営業成績不振、店員問題などのため、文政二年（一八一九）に小田原城下に近い池上村へ移し、㊦日野屋池上店に改変した。

これより早く、日野屋御殿場本店は文化四年（一八〇七）、小田原藩の鉛・焔硝（えんしょう）など軍需品御用と名主格（なぬしかく）を命ぜられ、文化十四年（一八一七）には開店記念に藩へ五十両、貧民に米百俵を寄付し、藩から二人扶持を頂戴した。全くの商人だが、身分は百姓となっている（『山中兵右衛門商店二五〇年史』参照）。

㊦日野屋への取替（とりかえ）証文

敷地は①太治兵衛の屋敷の一部と畑合せて九百坪（現西湘病院の所）を、②引合う（商をして利がある）期間貴殿心任せに貸す。③地代は三両三分を十一月に渡してほしい。④この屋敷についての紛争は加判人が解決し迷惑をかけない。

店は池上村の名家宮内太治兵衛の誘致だったので、関本店よりぐんと

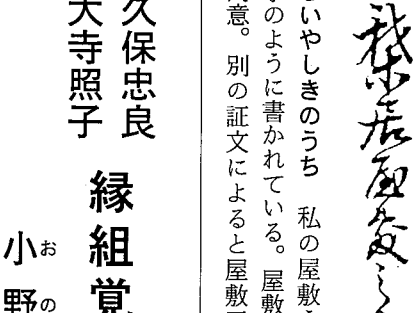


好条件だった。宛名の兵右衛門は本店主人、もう一人は支配人梅田惣兵衛である。「取替」なので同じ趣旨の証文が兵右衛門から太治兵衛へも送られている。

免許証に当る「酒株」は関本のを用いたが酒造米高は三百石と三倍以上にふやし、舟による輸送も行われる。

注意してほしい語句

A

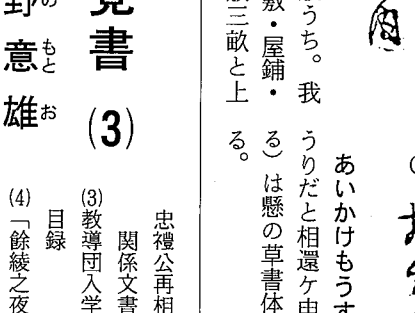


われらいやしきのうち　私の屋敷うち。我等が一字のように書かれている。屋敷・屋鋪・屋鋪は同意。別の証文によると屋敷三畝と上畑二反七畝計三反である。

B

しもつきかぎり　十一月晦日(みそか)(末日)まで。月の異名は沢山あるので、古語辞典等の一覧表をカードにして使うと便利である。

C



あいかけもうすまじく　かけない。文字どうりだと相還ケ申間鋪である。還(かん・めぐる)は懸の草書体と同形になり、慣用されている。

取替證文之事

一我等居屋敷之内ニ而、屋鋪(やしき)上畑三反歩之地所、年限之儀者、商売繁盛ニ而御引合次第、何ケ年成共、貴殿江任(まかせ)ニ御心ニ一貸置可レ申候処、実正ニ御座候。為ニ地代金一年々金三両三歩ツヽ、霜月限り可レ被(なさるべく)成ニ相渡一候。若此屋鋪ニ付外より彼是申者御座候ハヾ加判之者罷出(まかりいで)急度(きっと)狩明(あけ)、貴殿江少茂(すこしも)御苦労相懸ケ申間鋪候。為ニ後日一如レ件。

池上村
地主太治兵衛　印
別家源右衛門　印
セハ人太兵衛　印

文政二己卯年七月
日野屋兵右衛門　殿
同　惣兵衛　殿

大久保忠良 徳大寺照子 縁組覚書 (3)

小野意雄(おのもとお)

目次

一　はじめに
二　資料について
三　ご縁組み
(1)ご縁戚
(2)家臣への申達
(3)続く慶事
(4)慶事と小田原の動向
(5)官許の縁組み(以上一五九号)
(6)破談に終った縁組み
四　忠良公の事績
(1)略歴
(2)忠良公隠居
(5)明治八年
五　徳大寺公純女
(1)徳大徳寺家家譜抄
(2)大洲の加藤家
(3)阿部家家譜抄
(4)両敬関係の修復
(5)公純卿と實則卿
(6)忠禮公「御自書日記(抄)」から
忠禮公再相続関係文書抄録
(3)教導団入学関係文書目録
(4)「餘綾之夜話」抄録
(5)明治八年

(5)明治八年

さきに、破談協議の整ったのが明治八年五月二十二日と述べましたが、前掲資料のように「隠居願」は、その一ヵ月後の六月二十九日付です。理由は「性質虚弱……胃腸……脳膜炎」が挙げられています。そして裁可は、七月七日付。

ところが「教導団入学願」は、翌八月です。入団許可(九年一月二十一日)まで検査に数ヵ月を要しているとは言え、長期の療養を要する病気、あるいは不治の病気ではないということなりますから、枚挙された病気を主たる理由とする隠居ではないように思われます。前節に紹介した『餘綾之夜話』抄録からすると、忠良公の「勉強不熱心」、「懶情」といった性格・性情・行状に問題あったのかと推定されます。側近の者が福沢入塾を図れば退去する、はたまた「乱妨」の限りをなすなどし、家令・家扶・家従・家丁等の免職問題等を引き起こし、問題解決に忠禮・浄心院様はじめ旧重臣たちが苦渋している資料も別にあります。

とに角、「忠禮公を御諫め」しなければならない事態、「返籍」…養嗣子関係を解消し実家に戻す…を検討しなければならない事態に至って

しまったようです。このような事態では、徳大寺家から破談の話が出されても、止むをえません。

「破談」・「返籍」処置について、前掲「余」氏はじめ小田原在住の人びとからは、かなり強く異論が出されたようです。「国難に際し官の内命にて、末藩の荻野山中より入りて御相続ありし者にて」という一つの正論から。この正論を支える気持からでしょう、忠良公の葬儀は盛大に挙行されております。

(6)忠禮公「御自書日記（抄）」から

『落穂　大久保忠禮』所収の「御自書日記　自明治四年至同八年抄」には、つぎのような記録を散見でき、経過の一部を知ることが出来ます。

明治五年
八月　十日　忠良不勉強
同月　十五日　忠良幽閉
十月　十七日　忠良免幽閉
明治六年
五月二十六日　忠一生る
八月　七日　徳大寺殿より縁組の儀に付…
明治八年
正月二十一日　従五位殿奥方…
四月二十五日　従五位殿縁女…
五月　十二日　徳大寺殿より使者にて縁談之儀何分六ヶ敷存じ候條破談の旨願出…
五月二十二日　従五位殿妻徳大寺宮内卿御妹兼て…
六月十八日　此度内談の儀に付小田原表にて異論有之…
同月二十八日　大久保教義殿御出…

五　徳大寺公純女

(1)徳大寺家家譜（抄）

忠良公のの許婚者となられた「公純女」について、まず同家家譜から推定してみましょう。推定というのは、関係する諸家の家譜に、この内縁関係についての明記ないからです。

◇東大史料編さん所所蔵家譜抄

公純―実則　宮内卿兼侍従長
　　明治五年六月九日
　　依父公純願家督相続
　　従四位加藤泰秋室
　―福子　中院通富為養子
　―通規　西園寺公望為養子
　―威麿　文久元年正月誕生
　―照子　慶応二年十一月誕生
　―於菟
永

◇昭和新修

公純―実則　西園寺師季嗣
　―公望　山内豊資養女
　―福子　加藤(大洲)泰秋夫人
　―永　相良頼基夫人(離)
　　嘉永六、二生、明治一〇、一一没
　―通規　中院通富嗣
　―中子　相良頼紹夫人
　―威麿　西園寺公望養子(離)
　―照子　阿部(棚倉)正功夫人
　―吉左衛門　住友登久養子

東大資料は、その奥書から、明治八年六月頃作成されたようです。同年五月に破縁ですから、破縁直後の作成になります。昭和新修と東大資料では、登載者とその続柄に若干の異同がありますが、「福子」「永」「中子」のほか女子は、「照子」だけです。したがって、差し当り忠良公のお相手は、「照子」姫ではないかと想定できましょう。

(2)大洲の加藤家

「福子」姫が、大洲の加藤家に嫁していることは、大久保家の両敬関係から注目されることです。泰秋の父泰幹は、忠真公第八子「郁」の許婚者であったからです。大久保家家譜に、つぎの記録があります。

加藤遠江守泰幹室
未嫁而没

泰幹―泰祉＝泰秋（泰幹四男）
　―泰秋＝福子　山内（高知）豊資養女
　　徳大寺公純二女
　　嘉永四、九生
　　昭和五、九没

(3)阿部家家譜抄

正備―正功
　＝正定＝正耆＝正外
　　『正静　嘉永二、一一生
　　慶応二、六承
　　明治元、一二隠
　　明治一一、一没
　　幸　正静夫人　正備四女
　　後に京極（多度津）高典夫人（離）
　　後に大久保（小田原）忠禮夫人
　　安政二、五生
『正功　正耆二男　万延元、正生
　　明治元、三承
　　大正一四、九没
　　照子　徳大寺公純六女（第六子）
　　文久二、正生
　　昭和十、九没

阿部家家譜から、忠禮夫人「幸子」は阿部正功夫人「照子」の義母の関係にあることが判ります。そして簡単に整理すると、下記のような相関図が出来ます。

ちなみに忠禮公の結婚歴は、つぎの通りです。

「始娶下館藩石川総管妹、又娶支藩大久保教義女、皆以病卒。後娶従五位子爵阿部正功伯母、無子。側室松永氏有子四人。長日忠一為嗣子」

ここに、阿部正功公が子爵に叙されていることからすると、忠禮公と幸子氏との結婚は、華族令が制定された明治十七年七月以降のことか。

阿部正静

阿部　正功　享年30歳（明治8年）

（死別）明治11年1月没

幸子24歳

阿部幸子　（正功24歳）　徳大寺照子

（離縁）

京極高典　照子15歳

（破縁）

（明治11年43歳）

明治8年5月22日

大久保忠禮　忠良19歳

（明治11年38歳）　大久保忠良

(4)両敬関係の修復

忠良公と照子姫の縁組が裁可された明治二年、忠良公は十三歳、照子姫は九歳でした。婚約が破談になった明治八年、二人は十九歳と十五歳でした。

婚約が整いながら、輿入れが長らくされず、ご成婚に至らなかったのは、一つには世情不安定があるかも知れません。しかし、明治四年華族が東京に移住する前後には、大久保家でも、先述のように華族間の交際・交遊をかなり濃密にされておりますから、世情は問題外の筈です。

二つには、二人が未だ若少だったことが挙げられましょう。しかし、女子が十三歳になれば、必ずしも婚儀が早過ぎるということはなかったのが、当時の風習のはずです。それが出来なかった理由が、すでに見てきた忠良公の性格になる訳です。明治五年、忠良公十六歳、照子姫十二歳、これからという時の素行の乱れ、残念なことです。

なお、明治六年の忠禮公側室松永氏に男子（忠一）誕生があるかも知れません。しかし、問題性状の発生は前後しますし、そういうことは理由とすべきことではなかったとしてよいでしょう。「国難に際し、官の内命にて、……御相続ありし者にて……」という輿論（よろん）おこしのかぎりでは、そんな推測も逆にできますが。

ともあれ、こうした事情が斟酌された結果として、照子姫と阿部正功の結婚のあと、京極高典と離婚し実家に戻っておられた幸子、つまり正功の義母で大伯母の幸子が、正功夫人照子姫の前（上）許婚者忠良の義父である忠禮に嫁ぐことになったと思われます。

ここにおいて、照子姫の婚家阿部家を仲にして、徳大寺家と大久保家との関係は形を替えて、両敬関係を円満に続けることが、出来るように図られていると観ることも出来ましょう。としても、これが明治十七年以降とすると、十年の歳月が経っています。容易ならざることです。

他方、京極家ですが、高典の前室の子高備（明治六年七月生）の夫人弘子は、相良頼基二女（明治十年七月生）です。弘子の兄頼紹の夫人は、徳大寺公純五女（安政四年五月生）で、照子姫の姉です。ちなみに頼紹は頼基の弟で、兄の跡を明治八年五月に承継しております。

(5)公純卿と實則卿

両卿の略歴を『大日本人名辞書』（講談社学術文庫）により紹介しておきます。

徳大寺公純

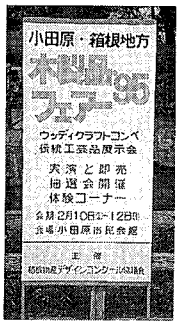
トクダイジ　キンイト　公家　鷹司政通の男、文政四年十一月京都に生る、大納言徳大寺實堅の養嗣となり、右大臣に至る、安政五年の大獄に座し謹慎五十日を命ぜらる、明治十六年十一月薨、従一位年六十三

徳大寺實則

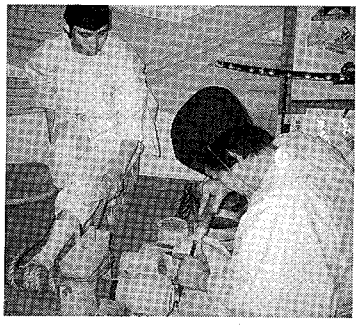
トクダイジ　サネノリ　明治天皇の侍従長、姓は藤原氏、公純の長子、西園寺公望、中院通規、住友吉左衛門等の実兄、其の先は鎌足より出で関院流の名門たり實則天保十年十二月六日を以て京都に生れ権大納言に任じ明治元年参与職、議定官、内局事務局監督等に任じ華族局長、爵位局長、官後麝香間祇候、侍従長に歴任し十七年侯爵を授けられ久しく侍従長内大臣の重職に在り従一位大勲位に進み侯爵に陞叙す大正元年明治天皇崩御の後宮中を辞して閑地に就く其の宮中に奉仕すること実に五十年忠臣君子の典型として称せらる八年六月薨ず年八十一

（了）

北條五代祭り



木製品フェアー'95



材木屋綺談　その六

文と絵　たかた・きくせん

ひと頃、談合（だんごう）なる言葉がマスコミを賑わした。今ではその内容を知らぬ人は居ないと思うが、商売に経験のある人を除いた一般庶民にとっては、理解は出来ても実感のない言葉である。私ども材木屋もこの「談合」には再三惑わされたので具体的な例をあげて説明してみよう。

ある村の神社で境内の杉を入札で払下げることになった。ただの一本だが樹齢も古く銘木として価値の高いものである。入札当日、多くの材木屋が参集した。入札した者が買えるのは当りまえである。

だんごう（談合）はこたえられない!!

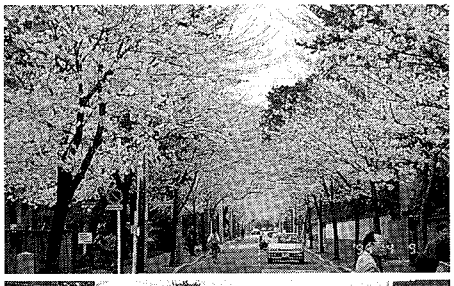
ところがここに「談合屋」と称する男がいて「みんなで競り合って高いものを買うことはない。村の者に探りを入れたところ評価格は二百万円らしい。どうだそれに近い値で落札して、あとで本気の値を出そう」ということになる。

そこで一同諒解してAが百九十八万円で落札した。入札後別の場所に寄り合い、Aをかこんでこんどは本気になって入札すると、なんと二百二十万円の値がついた。そこで二百二十万円差引き百九十八万円の差額二十二万円が浮く。当日の入札者十名で配当すると一人二万二千円の配当が貰えるという寸法である。従って村方は二十二万円損をした訳である。

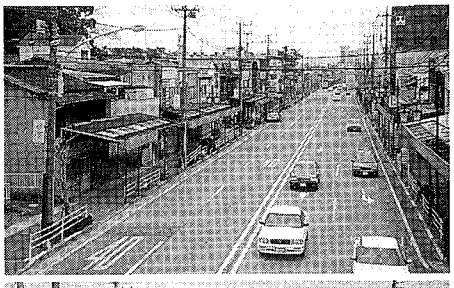
私は子供の頃、父がよく「きょうは暇だから何処そこの入札へ行ってダンゴを稼いで来よう」と語ったことを自分が経験して始めて理解したのである。しかし右の例はごく些細なもので、ゼネコンの談合のように億単位の金が動くとなると、公正取引委員会も黙っている訳にはゆかなくなる。談合とは文字通り不公平な取引であり、独占禁止法が固く禁ずる処である。

日本人は江戸時代の昔から閉鎖された社会で暮らしてきたせいか、内輪同志のいわゆる村意識が強く、談合取引についても、比較的罪の意識は薄い。従って談合禁止の罪を受けても、心から承服したようには見えないのである。幕末の開国から百三十年も経っているのに、永い間の習慣とはなかなか払拭出来ないものとつくづく思わされるのである。

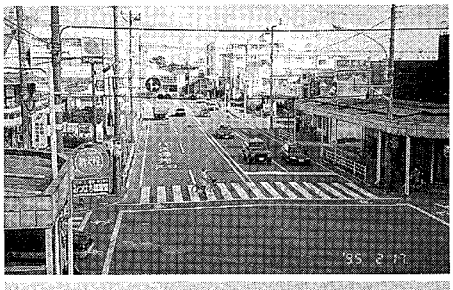
＜街並点描＞



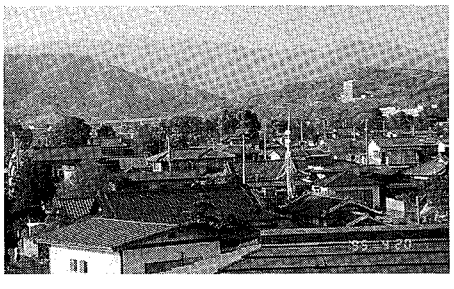
西海子通り（南町）



山角町（南町）



唐人町（浜町）



栢山・曽比

地方選挙の年

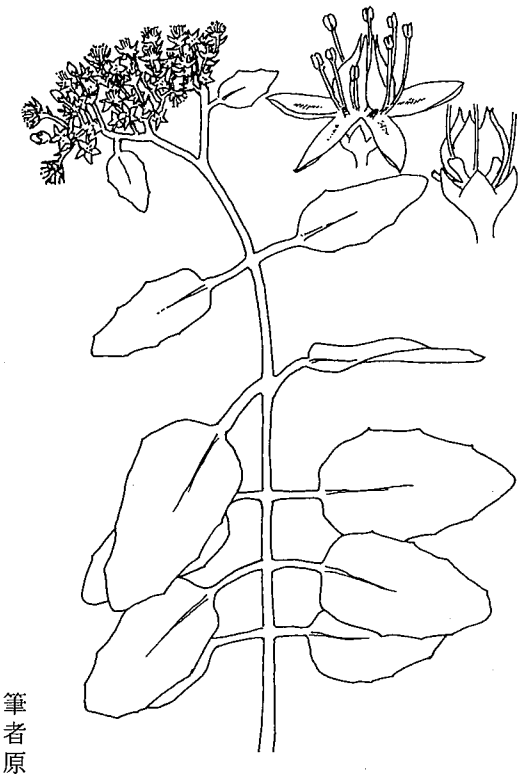
丹沢の植物 ㉔

城川四郎（きがわしろう）

この植物をご存じの方はよほど植物に詳しい方であろう。神奈川県では今のところ丹沢でまれに見つかっているだけである。花が地味なので、山草愛好家たちもあまり関心をもたないし、ふつうブナの樹幹の高いところに着生していて山歩きする人たちの目に触れることも少ないからである。

当時の文献では近畿地方以西に分布するとされていたが、私は昭和四〇年に西丹沢のユーシン沢で採集し、神奈川県にも分布することをはじめて確認した。採集した現場では何という種類かわからず、持ち帰って調べた結果アオベンケイであることがわかり、文献でその分布範囲を知ったときかなり興奮した覚えがある。図はそのとき興奮しながら描いたものでなつかしい。私が初めて見たのは渓側の岩上に生えていたので、その後も渓谷を歩くときは注意しながら歩いたがどうしても見つけることができなかった。ところが他の研究者が丹沢のブナの樹幹に着生しているアオベンケイを見つけたことから、近年は双眼鏡片手に樹幹着生の植物を見上げながら調べるとあそこにもあった、こちらにもあったという情報が伝えられるようになってきた。丹沢では、私が最初に見つけたような岩上生育の例はまれで、ブナ樹幹の高いところに着生しているのがふつうの生態であることがわかってきた。全国的な分布の状況から考えると箱根にも分布があってもよさそうに思える。双眼鏡片手にブナの樹幹を見上げながら頑張れば箱根にも見つかるかもしれない。植物体は三〇㎝ぐらい、ベンケイソウの仲間らしく葉は厚みがあり、九月下旬、小さな黄緑色の花が集まって咲く。花をよく見ると花びら、がく、おしべ、めしべの他に蜜腺がある。

アオベンケイ（べんけいそう科）
Hylotelephium viride (Makino) Ohba



筆者原図

東泉夏季大学講座

七月二十三日（日）一時半　来聴自由

○中河与一の思い出　詩人　中河久仁子夫人

○禅の生き方　東洋大学講師　高田　芳夫先生

東泉院　小田原市久野一五六五
電話　〇四六五－三五－三三四一番

徳川時代平民的理想

北村透谷

透谷碑建立申請に対して、当局が不許可とした理由のうちの一つに「徳川時代平民思想」を挙げている。この著述に透谷の危険思想が認められるという訳である。このことは、島崎藤村が、尾崎亮司、西村隆一の要請を受けて、昭和三年(一九二八)九月、当局に提出した答申書に記されている。そこで今回は、「徳川時代平民的理想」を取り上げてみた。

ついては、藤村の答申書の一部をここに掲げてみよう。

……〔前略〕透谷遺著の内容等につき御懸念あるやに承りました。右はまことに御尤の儀と存じます。就いては私は透谷の旧き友人であり、彼の没後その著作を編纂したのも私でありますから、私から調査の事項につき御答えするのが順序かと考えられます。左様の次第から私は今回の透谷建碑発起人の一人として、左に簡単ながら卑見を申上げます。

(一)透谷の遺著のうち、「徳川時代平民思想」(ママ)、「富嶽の詩神を思ふ」、其他随筆小品等の内容について透谷は宗教的と言ってもよいくらいに清純な心の詩人でありまして、その書いたものには一点の「ひがみ」もありません。すべては人間本位であるところから出発しています。その点を御注意下されば諒解せらるゝことゝ思ひますが、彼の「徳川時代平民思想」なども人間本位の立場から弊害多かりし徳川時代の平民に対して同情を寄せたものであります。……〔以下略〕

なお、透谷はこの文の中で、遊里で生れ育った粋という言葉について記しているが、昨秋の小田原市民文化祭の催しの中で「いきと粋と交わる小田原」といった調子のキャッチフレーズを、何気なしに用いているのを考えると興味深い。

徳川氏の時代に於て其遊戯其會話其趣味を探らんもの文士の著作に如くはなし〔及ぶものがない〕。而して〔そして〕文士の著作を翫味する〔意味や内容などを理解し味わう〕もの武士と平民との間に、凡ての現象を通じて顯著なる相違あることを研究せざるべからず。琴の音を知り琵琶の調を知るものは之を三絃〔三味線〕の調に比較せよ。一方はいかに荘重にいかに高韻〔韻＝おもむき〕なるに引きかへて、他はいかに輕韻卑調〔卑＝ひくい〕なるに注意するなるべし〔なるべし＝であろう〕。斯の如きは武士と平民との趣味の相違なり。謡曲を聽きたる人は淨瑠璃を聽かん時にこの両者に相容れざる特性ある事に注意するならむ〔ならむ＝だろう〕。かくの如く、其能樂に於て河原演劇〔江戸時代京都賀茂川の四条河原に芝居小屋があったことから〕に於て、又は其遊藝に於て、もしくは其會話の語調に於て極めて明晰なる〔明らかではっきりした〕區別あることを知らむ。

蓋し〔思うに〕我邦は極めて完成せる族制々度を今日まで持ち續けたるものなるからに、吾人の思想も亦た自から單純なりし事は爭ふ可からざる事實なり。而して其單純なる思想は階級に應じて武士は武士の思想を繼ぎ、平民は平民の思想を受けて、甲乙相共に異色をもつて生長し來りぬ。今日の我が語學に志ざすところのものが我が言語に甚だしき階級語に富めることを言ふも、元より此原因あるによればなり。ヲノリフヒック(敬禮語)に富めるも亦たこの族制々度の完熟せるに因れること多し。是れ我國言語の特色にして、この特色は以て我邦に於ける貴族(徳川時代にありては武士をも含む)平民の區界を判ずるに足るべし。

貴族平民の兩階級は徳川氏の時代に入りし時大に亂れたり。徳川氏は三河武士を以て天下を制したるものなれば從来の階級は概ね壞裂したり。加るに長年の亂世に人民の位地も大に前とは異なりて、從來貴族たりし者の落ちて平民の籍に投ぜし者の、從來平民たりし者の登りて貴族の位地を占めし者少數にてはあらざりしならむ。斯して徳川氏初代の平民は從前の平民よりは多少の活氣を帶びたりし事疑ひなし。故に彼等の思想も自から一種の特色を具備し得て隱然〔どことなく重みのある〕武門の思想と對峙せんとするが如き傾きを生じたり。宜なるかな〔もっとものことである〕、我邦に於て始めて、平民社會の胸奥より自然的育生の聲をこの時代に於て聞きたるや。

人は元祿文學を卑下して〔見下して〕日本文學の恥辱是より甚しきはなしと言ふもの多し。われも亦た元祿文學に對して常に遺憾を抱く者なれど、彼をもつて始て我邦に擧げられたる平民の聲なりと觀ずる時に余は無量の悦喜をもつて彼等に對するの情あり。然り俳諧の尤も熟したるもこの時代にて、戯曲〔演劇の台本〕の行はれしも戯作〔江戸時代の俗文学〕の出でしも、實に此時代にして、而して此等の物皆な平民社會の心骨より出たるものなることを知らば、余は寧ろ我邦の如き貴族的制度の國に於て平民社會の初聲としては彼等を厚遇するの至當なるを認むるなり。

我國平民の歴史は始めより終りまで極めて悽惻暗澹たる〔かなしく見通しなく希望が持てない〕現象を録せり。而して徳川氏以前にありては彼等の思想として世に存するもの甚だ微々たり。徳川氏以後世運の漸く熟し來りたるを以て爰に漸く多數の預言者を得て孚化したる彼等の思想は漸く一種の趣味を發育し來れり。然れども彼等の境遇は功名心も、冒險心も、想像も、希望も、或る線までは許されて其線を越ゆること叶はず、何事にも遮斷せらるゝ武權の塀墻〔障壁〕ありて、彼等は聲こそは擧げたれ憫れむべき卑調の趣味に甘んぜざるを得ざりしは亦た是非もなき〔いたしかたない〕事共な

り。

幕府は學藝の士を網羅するに油斷なかりき。幕府のみ然るにあらず、其高等種族（武士）は文藝を容れて大に品性を發揚したり。當時非凡なる學士の彼等の社會に厚遇せられたる事實は少く德川時代を知るものゝ共に認むるところなり。然るに是等學藝の士は平民に對して些の同情ありしにあらず、平民の爲に吟哦（声高からかに吟じ）せし事ある者にあらず、平民の爲に嚮導（導き）せし事ある者にあらず。かるが故に既に初聲を擧るの時機に達した平民の思想は別に大に俳道に於て其氣焰を吐けり。幕府は盛に能樂と謠曲とを奮興して代々の世主厚く能樂の大夫を遇し、而して諸

藩の君主も彼等を養て、武門の士の能く謠曲を謳ふ事能はざるは恥辱の如き隆運に向へり。學藝に習れず、奥妙なる（教義が奥深い）宗教に養はれざる平民の趣味には謠曲は到底應ずることを得ざるなり。故に彼等の中に自から新戯曲の發生熟爛する（爛熟　十分に発達しきって、すでに衰えのきざしさえ見え）ありて、巣林子（近松門左衛門）の時代に於て其盛運を極めたり。物語の類、例へば太平記、平家物語等は高等民種の中に歡迎せられたりと雖、平民社會に迎へらるべき樣なし。かるが故に彼等の内には自ら彼等の思想に相應なる物語小説の類生れ出でたり。加ふるに三絃の發明ありてより凡ての趣味の調ふに於て大に平民社會を翼け、種々の俗曲なるもの發達し來れり。斯の如く諸般の差別より觀察し來れば平民は實に德川氏の時代に於て、大に其思想を煥發し（かがやきあらわれ）たるものにして、族制的大隔離の餘を受けて或意味に於ては高等民種に對して競爭の傾きを成し來れるなり。

まことや（実に）平民と雖素より劣等の種類なるにあらず。社會の大傾向なる共和的思想は斯かる抑壓の間にも自然に發達し來りて、彼等の思想には高等民種に拮抗（張り合う）すべきものなくとも、自から不羈磊落なる（権力にしばりつけられず快活で細かいことにこだわらない）調子を具有し、一轉しては虚無的の放縱なるものとなりて、以て暗に武門の威權を嘲笑せり。故に彼等は自然に政權を輕視して、幕府の紀律に繫がれざる豪放の素性を養ひ、社會全體より視る時は一種の破壞的原素を其中に發生せしめて大に幕府を苦しめたり。制禁に遭ひたる戯作の類、遠島に處せられたる畫家の事、是が現象の一として擧ぐるに足るべし。漸く閭巷（市井）の侠客なるもの起り來りて幕政を輕侮し、平民社會の保護者となり、壓抑者に對する破壞的手腕（天知子（星野天知）の語を借用す）となりたるも是が一現象なりけり。

自然の傾向は人力の爭ふこと能はざるものなり。從來、文學なるものは獨り高等民種の境内に止まりて平民は一切思想上の自由を持たざりし如くなりしものが、聽かに（聽＝やがて）元祿以降の盛運に際會して、其思想界に多數の預言者を生みて、自から一貫の理想を形くりたれば、其理想する紳士も、其理想する美人も、其理想する英雄も有り〳〵と文學上に映現し出でたり。

こゝに注意を逃がすべからざる一大現象は遊廓なるものゝ大にこの時代に榮えたることなり。難波或は西京（京都）には古くよりこの組織ありしと雖、江戸にてこの現象の大にあらはれたるは慶長の頃かとぞ聞く（慶長見聞記に據る）。蓋し亂世の後、人心漸く泰平の樂娯を愬へ、彼の芒々たる葦原（今日の吉原）に歌舞伎、見世物等各種の遊觀の供給起り、これに次いで遊女の歴史に一大進歩を成し、高厦巨屋（高く大きい家）甍を并べて此の葦原に築かれ、都には月花共に此里にあらねばならぬ樣になれり。凡そ女性の及ぼす勢力はいつの時代にも侮るべからざるものなり、別して所謂紳士風なる者を形成するには偉大なる勢力ある事疑ふべからず。故に平民の中にありし紳士の理想は此遊廓の勢力によりて輕からぬ變化を經たり。讀者もし難波及び京都に出でし著作に就きて彼等の紳士なるものを尋ね見ば思ひ半ばに過ぐることあらむ（おおよそのことは推測できるであろう）。必らずしも巣林子以下の諸輩を引照するに及ばざるべし。遊廓は一個の別天地にして其特有の粋美（近世後期以降発展した一種の美的理念）をもつて其境内に特種の理想を發達し來れり。而して煩惱の衆生が歸依する（信じ從う）に躊躇（ためらい）せざるはこの別天地内の理想にして、一度、脚を此境に投じたるもの必らずこの特種の忌はしき理想の奴隷となるなり。斯の理想は世上に滿布したり。此理想は平民社會に擴がれり。むしろ高等民種の過半をも呑みたり。或時は粋といふもの此理想に外ならざるなり。而して此理想なるものは即ち平民社會の紳士を作りし潛勢力にして、平民紳士の服装、擧動、會話、趣味、この理想に基づかざる事甚だ稀なり。

（続）

紙数の関係から二回に分けて掲載します。

孝行者藤右衛門尚清 (3)

石綿　勉

四　母の生活体験

孝行者藤右衛門の母は、宝暦十一年（一七六一）に八十五歳で亡くなっている。（系図より）すると、延宝四年（一六七六）の出生となる。六代尚政の娘で跡取りの身なので、生涯を〝京紺屋〟で過ごした。夫は上郡塚原村出身の入り婿で、七代尚康である。

母八十五年の人生を、災害史からみると、天変地異があいつぐ、稀な天地乱世の中を生きてきたことがわかる。

遭遇した主な災害

- 元禄十六年（一七〇三）南関東大地震。小田原被害甚大。
- 宝永四年（一七〇七）宝永大地震、富士山大噴火。
- 正徳四年（一七一四）板橋村より出火、小田原宿大火。
- 享保七年（一七二二）暴風。
- 享保十九年（一七三四）大火。小田原城下の武家町家社寺など多数焼失。

特に元禄大地震と宝永の大地震・富士山大噴火は、いずれも大規模で巨大なエネルギー放出といわれるほどの大天災であった。わずか四年の間隔で発生した天変地異は、日本列島にとって未曽有の地殻大変動時代だったという。

この大天災は小田原を破壊した。元禄大地震は、小田原城天守閣をはじめ、城下の武家屋敷や町家などほとんどの建物が倒潰・焼失した壊滅状態を伝えている。復興の矢先に再び大地震と大噴火。家はもちろん道・川・田畑などの生活基盤が目茶苦茶に破壊され、火山灰の落灰被害も加わって荒地化した。土地の破壊荒地は、人びとの生活を破壊荒廃させて、困苦窮乏の生活が続くことになる。

母の27歳時から31歳時の時で、幼児（藤右衛門一歳から五歳時）の子育て真最中であった。「京紺屋」も倒壊は免れなかったであろうし、夫や職人衆と共に再建へ努力されたであろう。

大噴火七年後に、板橋村から出火した小田原宿の大火（母38歳時）この八年後には暴風による民家等の転倒（母46歳時）の災難が続いた。

全くついていない母、次から次へと不思議に災難とめぐりあう母であった。命がけの厄を運よくくぐり抜け、困窮の社会環境にめげることなく、生きてきた母であった。

こうした母に、藤右衛門が畏敬・同情・孝行の思いを強めていったのは当然の心情のように思える。

また、母は〝京紺屋親方のおかみさん〟としての顔をもっていた。しかも小田原領の紺屋頭を代々勤め、領内の紺屋をおさめてきた由緒ある紺屋である。従業員の面倒や来客の接待などおかみさんの働きは、家庭的温かさを加味して、人間関係に調子よく作用し、活性化に貢献したと思う。

祖母（六代尚政夫人）は、母39歳時に亡くなり、名実共に「おかみさん」となり、その活躍を想像する。家族等の食物管理や調理、衣服の洗濯つくろい、育児や躾、人寄せの企画運営、交際など家事一切をさばいていった働きの思いである。これはお手伝いさんの働きも考えられる。

京紺屋には、「田畑の高五石一斗二升あまり」の生産力をもつ農業経営もあった。農業は、家族全体の協力によって仕事がはかどる面がある。京紺屋経営が関係して手間借りの農作業も考えられるが、それにしても母の協働を想像する。

例えば水田経営の場合、苗取り・手植え・田の草取り・ひえどり・水まわり監視など、女性（母）でもできる働きや協働である。

畑作物の場合、自家用に調達する栽培の工夫と努力は、女の働きの妙味でもあった。

母は57歳時に夫を亡くしたが、翌年に内孫（九代目尚喜）誕生に恵まれ、徐々に「おばあさん」風情になってゆく。そして孝義録に出てくる母となる。

次は、孝義録の中にみえる母の人間像である。

- 年老いて歯がなくなる。
- 茶を好んだ。
- 毎朝おそく起きて、囲炉裏の所へ座る日課（病身か）
- 日の出前に起きて萬(よろず)の仕事をする信念（元気の時か）
- 剃髪し仏道修行の生活。
- 病で亡くなる。

老いた母は、藤右衛門の熱い思いの世話を一身に受けながら、静養している病身の風情である。

時期不明だが、母は剃髪得度して仏門に入る。その際法名「妙遠」を授与されて、仏道修行の生活に入った。母は「かねて剃髪したいと言っていた」という。信仰生活を歩もうとする、ひたむきな思いの実現であった。孝義録に「旦那寺の蓮正寺」（現・小田原市板橋・御塔生福寺）という記事があるので、日蓮宗の仏門に入ったと推察する。

母の法名は「蓮経院妙遠日理大姉」で、授与された「妙遠」が息づいている。本来「大姉」は在家にして仏道修行したしるしといわれているので、母のそれを思わせる。

母の一生には、京紺屋を舞台に、多様な社会事象にかかわる生活体験が展開され、これをうまく処理し家内を治めてきた内助の功があった。

藤右衛門は、この過程で見聞の度ごとに孝行の思いを高め、実践していったのであろう。そして老いた身の衰えと病身になった母に対し、手厚い配慮と看護で孝の誠を尽くしている。これは当然の対応であり、純粋な思いの孝行であったのかもしれない。

それが為政者（幕府や藩）の社会秩序の維持推進策にくみこまれて発展した。すなわち領主表彰となり、孝義録登載となって、孝行の行状が全国的に知らされたのである。当時の身分社会における人間関係のあり方や秩序を忠実に実践した模範例として伝達され、忠孝道徳の教化に利用されていったのである。

（続）

紅蓮洞・坂本易徳 ㉑

岡部忠夫

帝国大学について
雪嶺の論評（承前）

渡邊洪基（こうき）が帝大総長となったのは、森文相の人選ではなく、伊藤首相の推薦によるものである。

伊藤は、大隈重信が改進党を結成すると共に、東京専門学校（早稲田大学の前身）を創立し東京大学出身者を教師として招いて以来、大隈を警戒し、大学の監督のよろしきを得て、帝大生が残らず政府に従順なる事を願っていた。

それには、東大総理の加藤弘之をそのまま、帝大総長に据えるのは、学者肌の加藤では生ぬるい。政府の意図を一層徹底させるには、それに熱心な渡邊を適任として任命した。渡邊は、明治四年（一八七一）、岩倉具視らの遣欧米使節団に随行中、若手の中で働き者と見られ、伊藤の眼鏡に叶った人物で、最高学府の教育を委ねられたのである。

三宅雪嶺の『同時代史』の評論は、更に、森文相の教育政策やその人選について及ぶが、それは省くことにする。

初代帝大総長渡邊洪基

初代の帝大総長に就任した渡邊洪基の経歴が振るっている。このことについて小島直記氏は、『日本策士伝』（中央公論社刊）に「お飾り頭取」というタイトルで載せているのでこれを載録しよう。

原敬と縁の深い渡邊洪基とは、どういう人であったか？『日本歴史大辞典』（河出書房刊）によると、「一八四八～一九〇一。明治時代の官僚。一八七一（明治四）年岩倉遣欧使節に随行し、帰国後、太政官、外務省、司法省に勤務。八〇年司法省大書記官として集会条例の起草に当たり、自由民権派に攻撃されたため官をやめた。八五年東京府知事となり、翌年帝国大学の創設とともに総長に就任した。九〇年オーストリア駐在公使、九七年貴族院議員などを歴任した。一九〇〇年（明治三三）に伊藤博文が立憲政友会を創立したとき、伊藤直参の創立委員としてこれに参加した」

となっている。

なかなか多彩なキャリアが列挙されているものの、なおいくつかの経歴が抜けている。たとえば、越前福井藩士、慶応義塾出身、北浜銀行頭取など、三つの事項からだけでも、この物語に落とすことのできないさまざまな人間模様が広がるのだ。

「慶応出身で、帝大総長あがりの銀行頭取」――これだけでも、今日からは想像もできない奇抜な人事。まさに日本資本主義形成過程ならではの一つのドラマにちがいなかった。

なお、渡邊洪基について記した『国史大辞典』（吉川好文館刊）は、小島直記氏が引用した『日本歴史大辞典』より後発だけに巻数も多く、より詳しくなっていて、越前の蘭方医家の生まれとか、福澤諭吉について英語を学んだなどを載せている。しかし、渡邊の北浜銀行頭取就任には触れていないので付け加えておく。

ともかく、違う畑の人材を引き抜くとは、弾力性に富むというか、融通無碍（むげ）というか、省庁の枠を越えた人事は、スペシャリストとしてよりは、その行政的手腕を期待してのことであろう。

それにしても、教育畑出身でない渡邊が最高学府の総長に充てられるとは、明治国家だから可能であったといえよう。ともかく、現在では到底及びもつかない事である。他にも、渡邊と似通った例はあるが、いずれにしても、現時点からすれば破天候な人事ということになる。

官僚制度の種まき

渡邊洪基は、帝大総長に就任すると共に、法科大学長を兼任。また、東京府下に設立の私立法律学校を監督する権限を持ち、更に、翌二十年（一八八七）、文官試験局長官を兼ねた。

これより先の明治十八年十二月二十二日、伊藤博文は、初代内閣総理大臣に就任すると、その四日後の二十六日、現在及び将来にわたって改めなくてはならない各省の事務整理に就いて、

次の五項目の大綱を各大臣に指示している。

一、官守を明らにする事
〔官吏の定数を定める〕
二、選敍の事
〔官吏の任用と試験による〕
三、繁文を省く事
四、冗責を節する事
五、規律を厳にする事

いうなれば、行政改革断行の指示ということだが、三宅雪嶺は、『同時代史』にこんなふうに論評している。

門閥のない者が首相の実権を揮うことは、前に大久保利通の例があったが、当時なお、門閥的な大臣〔太政大臣三條實美、右大臣岩倉具視ら〕を戴きその手を経て天皇に上奏するのが順序であったがここに、太政官制を廃止し内閣制度が確立されるに当って、閣員が悉く大臣と称し、従一位となったのは、旧門閥の代りに新門閥を作る意図があるとせよ無いとせよ、強い決心と盛んな意気でこれに当った。

大久保は年齢も長じ、閲歴も多く、自然に重望を負っていたけれど、伊藤は比較的後進で、昨日までは同列におったところ、今日よりは太政大臣の職務を執行するのは、自身も、他人も、いささか擽ったく感じ、これに関して話し合ったことも少なくない。

それにしても、伊藤は、当初首相職をビスマルク〔一八一五～九八ドイツ第二帝国建設の功労者。その初代宰相〕の位置の如くする案であって、自ら首相に就任することを多少遠慮したかは如何わしく、閣僚は、少なくとも表面上首相の統制に服従することに一致し、これを明白にする態度に出た。

伊藤は、当時元気旺盛で、殊に最初意気が大いに揚がる癖があり、自らこの上もなく乗り気になり、閣僚を盛んに激励してやまず、勤王に率先し、廃藩置県を断行したように新たに大改革の実行を期していた。

伊藤総理の行政改革の大綱の閣僚への指示は、満を持しての事であろうが、雪嶺は、更に次のような批判を加えている。

正々堂々と大綱を表明した事には目を見張るものがある。しかし、一方に過去の欠点を指摘し、一方に現在及び将来の施策を列挙しているが、過去の欠陥に関して自ら力が足りなかったと、後悔し残念であるといった情が見えないのは遺憾である。もし早く弊害があらわれているのに気付き、適当な処置をとっていたならば、幾年間も続いたもめ事を予め防ぐことが出来たであろう。民選議院設立建白といい、国会開設請願といい、自身の不平に基づく所はあるけれど、官庁の弊害が明らかに知れ渡っている事に大きな原因がある。

雪嶺の論評は、まだ続くが省略するとして、先に挙げた五綱目の大綱にうち、二番目の「選敍の事」では官吏の登用は学術試験によることとして、その試験を高等と初等とに分ける事を示した。

高等試験は、いわゆる高文（高等文官試験）と呼ばれ、やがて、行政の専門集団としての官僚機構を作りあげる大本となった。戦後は、国家公務員上級職試験として衣替えされ、名称は変ったが官吏の登龍門である事には変りがない。

私立法律学校の設立が続いた明治十年代

ここで、先に挙げた渡邊帝国大学総長が監督する事になった私立法律学校の事について、ちょっと触れよう。

「帝国大学令」が発令された五ヵ月後の八月二十五日、文部省は「私立法律学校特別監督条規」を定め、私立法律学校を帝国大学総長の監督下に置くこととした。

その対象となったのは次の五校である。

。専修学校（現・専修大学　明治十三年創立）
。明治法律学校（現・明治大学　明治十四年創立）
。東京専門学校（現・早稲田大学　明治十五年創立）
。東京法学校（現・法政大学の一源流明治十四年創立）
。英吉利法律学校（現・中央大学　明治十八年創立）

わが国の法学教育の沿革をみると、明治三年（一八七〇）に制定された「大学南校規則」に法科生徒が修める法律として、民法など十科目ほど挙げられている。

一方、同五年、司法省が判・検事養成のため、明法寮のち司法省法学校と呼ばれる法律の専門教育が始まっている。

当時、法学を学習しようという希望者は多かった。わが国の法律は、まだ未整備な頃で、司法だけでなしに、行政も、将来大きな夢を持てる分野であった。

ところが、東京大学法学部卒業生は、創立六年後の明治十六年（一八八三）に僅か三十八名という少なさだったという。そのような、時代背景のもと、私学が、法学の需要を補完する形で開設された訳である。

一方、八年間の修業期間八年の司法省法学校正則科の他に三ヵ年間の速成科が明治九年に設けられていた。

紅蓮洞・坂本易徳が『小田原の史実と伝説』（大正十一年九月発行第八集）へ寄せた「最始づくし」に「法学の出身では司法省の三年生を卒業して、諸処の判事や検事を勤めた大新馬場の小川正治氏がその最初である」と記す。

（続）

郷土誌目次紹介

◇おだわら―歴史と文化

発行　小田原市役所企画部
市史編さん室
〒250　小田原市城山四二一一
TEL〇四六五(23)八五一〇
第八号95・2
A5　一三二頁　価一、二〇〇円

【論　文】
・近世中期村社会の動揺とその再編―小田原藩領西相模地方の地域社会の構造を中心に　阿部　昭
・小田原藩における近世後期の改革と中間支配機構　取締役村と組合村をめぐって　馬場　弘臣
・中世後期の「栢山一宮氏」　飯森　富夫
・敗戦後の町内会・隣組　井上　弘

【史料紹介】
・新出の後北条氏関係史料三点について　鳥井　和郎
・世紀をまたいだ町村合併　星野　和子

【調査報告】
・小田原の中世絵画抄　相澤　正彦

【市史の広場】
・北村美那子の日記から　江刺　昭子
・国府津の歴史は国鉄とともに　簑島　清夫
・小田原の虫今昔―近頃気になるアオマツムシ　佐藤　勝信
・丘陵・台地のすがたと低地の地下を探る―小田原市域西部を中心に　内田智雄

◇小田原郷土文化館研究報告

編集発行　小田原市立郷土文化館
〒250　小田原市城内七番八号
電〇四六五(23)一三七七
No.31　平成七年三月
B5　五五頁　価六〇〇円
・城下町小田原の考古学的調査　諏訪間　順
・助郷夫役の基礎的考察　宇佐美ミサ子
・小田原地方の神社祭礼について―近・現代における祭りの形態とその変遷―　浜田　和政

◇市史研究　あしがら

編集発行　南足柄市
〒250-01　南足柄市関本四四〇
電〇四六五(74)三二一(代)
第七号　平成七年三月
A5　二二頁　価一、〇〇〇円
・酒匂川と田中丘隅の治績　本多　秀雄
・「足柄の寺子屋」補遺　高田　稔

《研究ノート》
(1)近世南足柄地域の村役人（その二）　藤平　初江
(2)南足柄の文学碑調査報告（その一）　俳句の碑　南足柄歴史同好会文学碑グループ

《市史の小径》
(1)最乗寺への道標を尋ねて―開創六〇〇年祭に因んで―　高橋　佐年
(2)金太郎説話を追いかけて（その二）―金太郎説話などに登場する動物たち　笠間　吉高

◇史談足柄

編集発行　足柄史談会
〒250-01　南足柄市斑目五三三
市川鉐雄方
第三十三集　A5三三頁
・特別講演　大森氏と南足柄　大森　頼忠
・調査報告　南足柄の水車　足柄史談会調査研究部
その1
・足柄地蔵菩薩縁起について　笠間　吉高
・江戸時代の小田原藩　本多　秀雄
・沼田地区史跡を訪ねて　渡辺　治美
・明治から昭和　平山の変遷　鈴木庄太郎
・森と水の公園・分沢川の今昔　杉山　常弥
・郷土の風物詩　石村　豊
・箒杉と杉戸の歴史　磯崎　藤子
・「壜」（ママ）のこと　小沢　勇一
・長泉院晋山式結成式参観記　小見山　満

◇真　鶴

発行　真鶴町郷土を知る会
〒259-03　真鶴町岩六〇六
桜井光夫方
三四号　平成七年四月　B5五六頁
・北条氏朱印状を読む　湯本　満
・『真鶴町史資料編』を読むに当って　遠藤勢津夫
・真鶴の三名字　川ノ邊昭治
・平成六年度研修視察記
・「零戦」復元飛行　ハワイから名古屋へ　桜井　光夫
・真鶴の教育に思うこと　青木　正
・近郊三題　さとうよしこ

◇伊豆史談

発行　伊豆史談会
〒411　三島市広小路八八
土屋　寿山方
百二十四号　A5　八八頁
・豆州戸田村の石材切出し(一)　高本　浅雄
・旧愛染院考　玉田　寿夫
・旧金山信仰　土屋　浅雄
・念仏行者唯念上人　泉頭　山人
・ある御家人の由緒書2　土屋　寿山
・沼津藩主三代の書状及び短冊について　関　守敏
・新史料「郡村高書上帳」による沼津藩領についての一考察　関　守敏
・昭和五年七月再校『足柄及箱根古道考』（その二）　石井　廣夫
・続第九回東海道宿場大学（石部～京都）最終回　土屋　寿山
・沼津・富士市内史跡見学会

新刊紹介

◇小田原市　史料編

原始　古代　中世Ⅰ

『小田原市史』は、史料編九巻、通史編三巻、別編三巻、ダイジェスト版一巻の全十六巻の刊行予定であるが、このうち史料編六巻（中世Ⅱ・Ⅲ、近世Ⅱ・Ⅲ、近代Ⅰ・Ⅱ）が発行されており、今回の史料編は、その首巻に当るもので、第一部「考古」、第二部「文献」第三部「銘文」に分けられている。

第一部　考　古

小田原市内の先土器文化期から平安朝期にかけての

遺跡二〇三カ所のうち、比較的詳細に判明している三十四遺跡を概ね年代順に取りあげている。

第二部　文　献

古代から戦国時代までの文献六二四点を、第一章「律令～平安時代」、第二章「鎌倉～室町時代」、第三章「交通宿駅」、第四章「戦国時代」第五章「小田原合戦」に分けて収めている。なお、小田原北条氏の関係史料が余りにも膨大な分量に達し、中世Ⅱ・Ⅲでは北条氏の発給文書のみで、今回の中世Ⅰでは、それ以外の小田原地域の関係資料を載せている。

第三部　銘　文

小田原市内に所在する石造物、仏像、胎内文書、墨書・建造物、金土品の戦国時代以前の銘文、市外所在の同種の遺物の銘文計五六点を収録している。

別冊付録

「小田原合戦関係文書目録」

市内の書店で販売されているが、遠隔地で購入希望の方は、直接、小田原市史編纂室（小田原市城山四―二―一一電〇四六五(23)八五一〇）に申し込まれるとよい。

A5判一〇八頁　六、〇〇〇円
送料三一〇円

◇北村透谷と小田原事情

編集　北村透谷没後百年祭実行委員会
発行　夢工房
B6判　三二頁　価一、二〇〇円

この書には、昨年五月十五日、北村透谷没後百年祭を期にさまざまな形で発表されたものが収められている。

実行委員会発起人代表、映画監督井上和男氏の、「透谷と小田原の文学者たち」は、谷津公民館での講演を加筆整理、同副代表金原左門中央大学教授の「西湘の地に蘇っていた透谷」は、金原教授が『湘南文学』第七号に寄せたものを加筆。

また同編集委員会の要請により、『小田原史談』一五六、七号の二号にわたる透谷特集のうちから何編かが提供されている。そのほか、十名近くの人によって新たに執筆された稿が、共に第一章「透谷と小田原―土着の視座」に収められている。

第二章「透谷断層―わたしの透谷」には、百年祭の偲ぶ会のスピーチの他、数編のエッセイが載る。

末尾に内田四方蔵氏による年表を掲げる。

本書は、神奈川県内のほか、町田、八王子の書店に於ても販売されている。

小田原史談会総会

小田原史談会総会は、平成七年四月二十二日(土)、十三時より小田原市立郷土文化館において開催。平成六年度事業報告、同決算報告、監査報告が行われ、承認、次に、同七年度事業計画、収支予算が承認された。

引き続いて、小田原文化館々長三津木国輝氏による「近代文学と小田原」と題した講演が行われた。

〔出席者〕（順不同敬称略）

富田千春、向山重忠、湯川玲子、石井艶子、柳川辰夫、高橋佐年、西山鉄太郎、石綿勉、吉池清、小林房子、岡部忠夫、和田登、曽我保夫、岩本武、松本巽、小西マツ、豊田ミツ、佐宗正雄、高田喜久三、横沢正美、相原俊夫、杉山竹二、安藤繁美、井上高久、吉原恵子、増田任司、稲子藤江、石井敏三、大川務、小田中正二、山口一夫、本多孝三、内田美枝子、藤沼キク子、勝俣末子、石川タカ子、河本登志、本多正八、斎藤精一郎、小野意雄、角田道、和田治助、石井啓文、今井正敏、剣持芳枝、田島マサヱ、高橋フミ子、遠藤定雄、内田清、遠藤定雄、保田徳子。　計五十一名

事業報告、決算報告、事業計画、収支予算次の通り。

平成六年度事業報告

◇平成六年四月二十三日(土)
総会　講演「相模川と酒匂川流域の古墳群」
小田原市文化財保護委員長
杉山博久氏

◇五月十五日(日)
北村透谷没後百年墓前祭
（役員出席）

◇五月二十八日(土)
曽我傘焼祭（役員出席）

落穂集

◎山村武彦氏（特別賛助会員優光社々長）は、このほど、科学技術振興功績者として田中科学技術庁長官から長官賞を受けた。氏は、昭和三十九年会社設立以来、地震対策用品などの研究開発を続け、振興普及に努めてきたのを認められ、特にこの度の阪神大震災に際し非常電源装置が高く評価されたためである。

◎田島亨氏（特別賛助会員ヤオマサ社長）は、このほど『あばれ商業　まけてたまるか！』を出版された。高校卒業後家業の八百屋を継ぎ、地域社会への奉仕をも念頭に置きながら、八店に及ぶスーパーマーケットに育てあげたが、その半生や、そこから得た教訓が綴られて居る。

◎去る六月十日(土)、小田原市民会館に於て、成人学校女声コーラスを終了した人達のグループ「コール・キャロット」結成15周年を記念して第一回のリサイタルが盛大に開催された。指揮は松本敦子さん。その指導ぶりは輝いていた。

訃　報

山口　隆男氏
（小田原市南町四―六―一）
昨年十二月十五日逝去されました。享年七十一歳
ご冥福をお祈りします

◇七月二日(土)
史跡めぐり　千代台方面
◇七月十一日(月)
北条氏政・氏照墓前祭
(役員出席)
◇九月二十一日(水)
史跡めぐり　多摩方面
◇九月二十六日(月)
久野古墳祭(役員出席)
◇十一月十七日(木)～十八日(金)(一泊)　史跡めぐり
白河・那須・下野方面
◇一月二十二日(日)
初詣　遠州一之宮小国神社他
◇二月二十五日(土)
講演「小田原の寺子屋師匠たち」　高田　稔氏

役員会
4/23　6/17　10/14　1/18

編集委員会
。委員会　5/24　6/1　9/14　9/24
。No.157　12/6　12/15　2/23　3/4
北村透谷特集続編
六月発行　三二頁
。No.158
地震特集
十月発行　三六頁
。No.159
一月発行　三〇頁
。No.160
三月発行　二八頁

平成七年度事業計画
◇総会・講演会
前記の通り
◇史跡めぐり
市内二回、日帰り・一泊
各一回、初詣
◇講演会　二回(含総会時)
◇会員名簿発行
◇役員会
必要に応じ随時開催

監査
高橋佐年
杉山竹二

平成7年度収支予算書(一般会計)
収入の部

区分	予算額(円)
前年度繰越金	158,153
会費	1,200,000
市補助金	24,000
雑収入	2,847
合計	1,385,000

支出の部

款	項目	予算額(円)
庶務		290,000
	総会費	30,000
	会議費	80,000
	会員連絡費	110,000
	交際費	60,000
	事務用品費	10,000
会員		100,000
	振込手数料	5,000
	名簿印刷費	60,000
	名宛ラベル	35,000
企画		145,000
	調査費	70,000
	講演会費	55,000
	座談会費	20,000
会報		700,000
	会報印刷発送費	700,000
予備費		50,000
	予備費	50,000
積立金		100,000
		100,000
合計		1,385,000

平成6年度　収支決算書(一般会計)
収入の部

項目	決算額(円)	備考
前年度繰越金	248,360	
会費	1,221,000	407名
市補助金	24,000	
銀行利子	312	
雑収入	8,000	
預り金	18,000	
合計	1,519,672	

支出の部

款	項目	決算額(円)
庶務		288,285
	総会費	15,100
	会議費	88,251
	会員連絡費	129,128
	交際費	53,436
	事務用品費	2,370
会員		78,410
	振込手数料	3,410
	名簿印刷費	50,000
	名宛ラベル	25,000
企画		129,824
	調査費	78,396
	講演会費	41,000
	座談会費	10,428
会報		700,000
予備費	予備費	0
		0
積立金	積立金	150,000
		150,000
預り金	預り金	15,000
合計		1,361,519

財産
(積立金)　766,113円
内訳　定期貯金 300,000円(平成5年8月2日預金)
さがみ信用金庫 466,113円(平成6年4月21日預金)

差引残高(次期繰越金)
1,519,672円(総収入) － 1,361,519円(総支出) ＝158,153円(次期繰越)

預り金　15,000円　兵庫県高砂市沼田晃様会費前納分

平成7年度編集委員会予算書

区分	収入額(円)	支出額(円)
前年度より繰越	2,945	
本会計より繰入	700,000	
特別賛助会費	790,000	
雑収入	5,055	
会報印刷費		1,287,500
会報発送費		99,000
編集費		79,000
取材費		22,500
事務費		10,000
合計	1,498,000	1,498,000

特別賛助会員
収入のうち特別賛助会費(一口一万円)七十九万円は六十五法人の協賛によるもので、内訳は次の通り。

平成6年度史跡巡り収支決算書

月日	探訪先	人員	収入額(円)	支出額(円)	差引残高(円)
7.2	千代			15,000	△ 15,000
	府中国立	48	336,000	339,690	△ 3,690
11.17-18	白河今市	18	630,000	622,465	7,535
1.22	初詣掛川袋井	45	315,000	288,925	26,075
3.31	銀行預金利子		553		553
合計			1,281,553	1,266,080	15,473

314,937円(前年度繰越金) ＋ 15,473円(本年度剰余金) ＝ 330,410円(次期繰越金)

平成6年度編集委員会収支決算書

区分	収入額(円)	支出額(円)
前年度より繰越	5,627	
本会計より繰入	700,000	
特別賛助会費	790,000	
雑収入	15,301	
会報印刷費		1,297,800
会報発送費		98,770
編集費		78,255
取材費		23,270
事務費		10,338
次年度繰越金		2,495
合計	1,510,928	1,510,928

〔三口〕鐘紡㈱小田原工場、富士写真フィルム㈱小田原工場　二法人

〔二口〕足柄香粧㈱、㈱小田原魚市場、小田原瓦斯㈱、JA小田原、小田原中央青果㈱、カネボウ化粧品鴨宮工場、さがみ信用金庫、みみづく幼稚園、ヤオマサ㈱、㈱ユアサコーポレーション小田原製作所　以上十法人

〔一口〕五十三法人

計　六十五法人

雑収入は寄付金（一万円）と預金利子。

支出のうち、会報印刷費は、第一五七号～一六〇号（計一二六頁）の四回分です。会報発送費は、会員の外に学校（県西二市八町の小・中校と高校）、公立図書館・大学図書館ほか各文化機関や行政機関への郵送料（近くは直接配送）及び封筒代等。編集費は、写真複写代、お礼、執筆者連絡、編集打ち合せ費用。取材費は、フィルム、DPE、コピー代等。事務費は、文房具代等です。

お陰様をもちまして、充実した内容の編集が出来、非常に好評をいただいております。とりわけ、北村透谷特集は、透谷没後百年祭を支えたものであるという評価があり、また、地震特集については、大きな反響があり、識者の間にも高い支持を受けました。

『小田原史談』は、地域の文化の一つの顔であるという意気込みで、編集委員一同努力をしておりますので、今後ともよろしくご支援、ご鞭撻くださるようお願い申しあげます。

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
小田原銀座 アオキ画廊
熱海 アオキクリニック
足柄香粧株式会社
兎屋魚屋
紳士服の アメリカヤ
㈱アルファ
画材 ガクブチ いのうえ
伊勢治書店
伊豆箱根トラベル 小田原営業所
かまぼこ
南足柄関本 おぎの整形外科・歯科
税理士 公認会計士 小澤重治事務所
株式会社 小田原魚市場
小田原ガス
小田原市農業協同組合
小田原報徳自動車
株式会社オートセンター・スギヤマ
㈱小田原中央青果 株式会社
オリオン座
かまぼこ 籠清
合掌苑
鐘紡株式会社小田原工場
カネボウ化粧品鴨宮工場
神尾食品工業 株式会社
木地挽 日下部産業 株式会社
かみやま小児科クリニック
興電社
小伊勢屋
㈲小松石材店
さがみ信用金庫
趣味のごふく さくらい
宝飾専門店 JEWELRY Shimano

正榮堂
中華料理 昇玉
杉山水道工業 株式会社
鈴廣かまぼこ
石寿堂スポーツ
大営不動産
割烹 おるは
そばそ 二宮
茶半家具株式会社
ちんぎう本店
土谷建設株式会社
角田ガクブチ店
東京電力㈱小田原営業所
株式会社 東華軒
トーホー建物 株式会社
和菓子 菜の花
八小堂書店
八十マサ
平井書店
富士写真フイルム 株式会社小田原工場
株式会社 報徳
栄町 松坂屋
学生専科 ㊇ マルク
食器の店 マルサンストアー
みつゆき設計
諸星運輸グループ
株式会社 美濃屋吉兵衛商店
みみづく幼稚園
ヤオマサ株式会社
山口菓子舗
株式会社ユアサコーポレーション 小田原製作所
防災器具 優光社

年会費　普通会員三千円
〇〇二〇-三-六四三三六
辰巳